

躍進日本と列強の重圧

陸軍省新聞班著

666

50



0010681-000

666-50

躍進日本と列強の重圧

陸軍省新聞班・編

陸軍省新聞班

昭和9

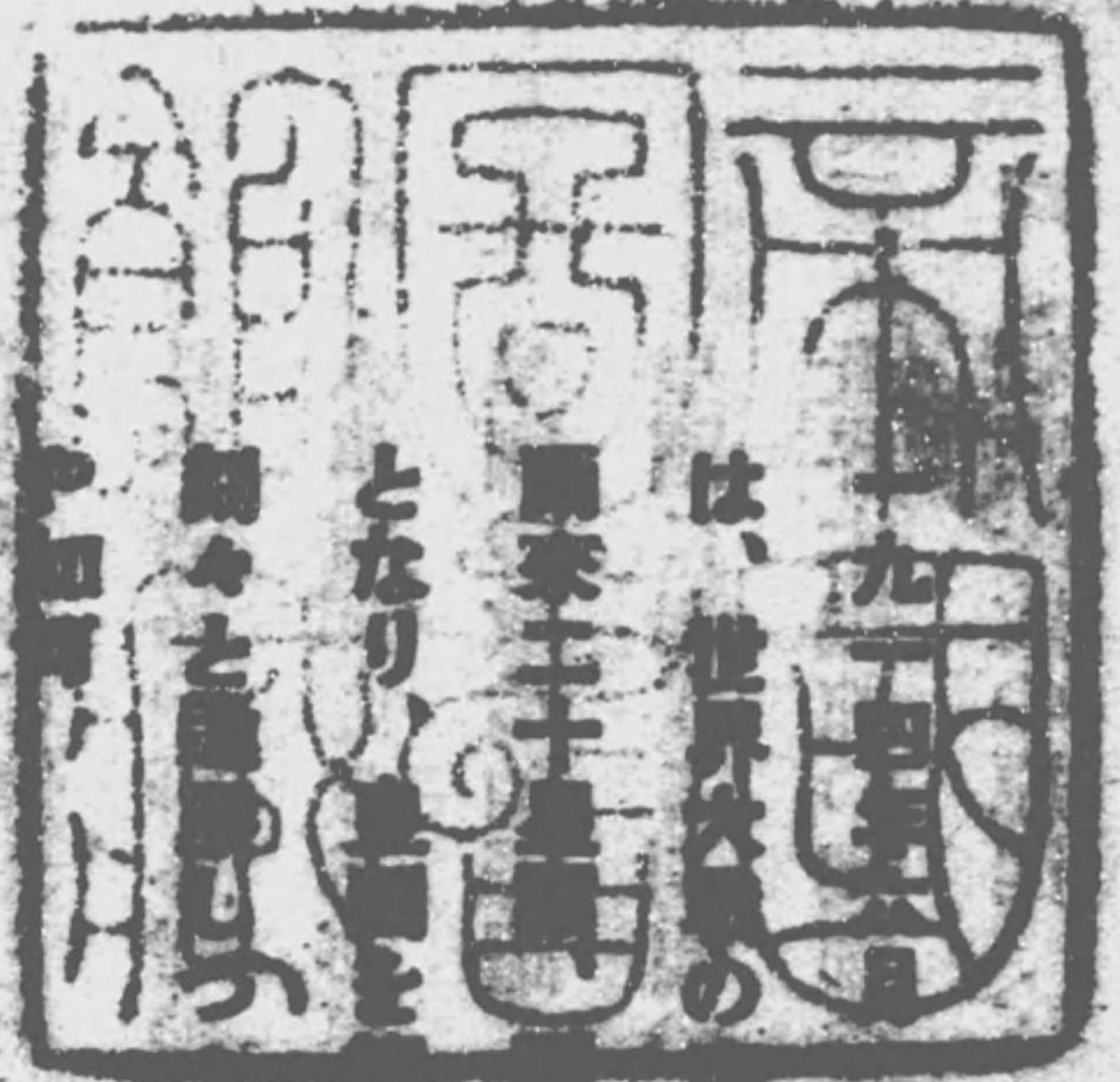
ABJ

595



隆進日本と
列強の重歴

昭和九年七月二十日
東京 隆進社 刊



二十八日は、サラエヴォ事件発露の日、七月二十八日
 は、世界大戦の
 開戦を告げる日である。
 開戦に際しては、列強諸國の
 となり、世界を
 二の國たらしめんとする意味は、世界の歴史
 あり。之に對する國民の覚悟や如何、準備、対策



目次

一 前言……………一頁

二 躍進日本の實相と列國の重壓……………五

 日本商品の海外躍進……………五

 人口増加と日本移民排斥問題……………四三

 皇國の政治的飛躍……………三七

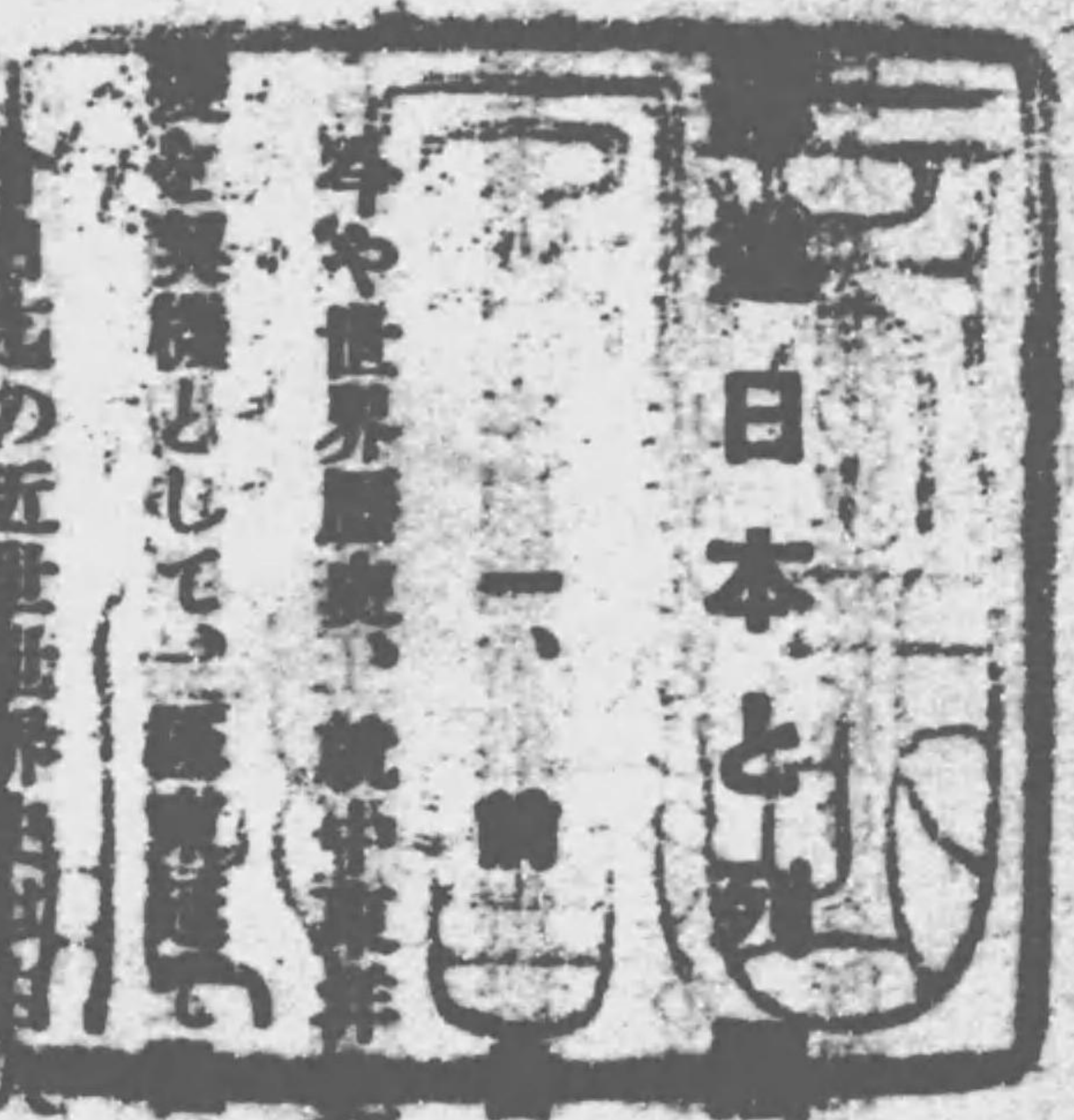
 皇國に對する列國の策謀……………七四

三 世界大戦前の列國の飛躍と其後の運命……………七七

四 列國失敗の原因……………八九

五 結言—危機突破對策……………九三

666-50



日本と列國の重壓

今や世界歴史、就中東洋史の再吟味を爲す可き時機は到来した。何となれば、滿洲事變を契機として、世界歴史は、明かに一大轉換を齎らしたからである。

本誌の近世世界史は白人の征服史であつた。戦近の東洋史は、全アジア十一億の黄色人種に對する、白人列強搾取の歴史であつた。新興日本は、彼等より興へられた、あらゆる侮辱と屈辱とを忍び、或る時は彼等の極東に於ける忠實なる番犬を以て甘じ、或る時は民族發展の正當なる權益行使を拒否せられ、或時は戦捷に伴ふ當然の榮譽すらも剥脱せられ、所謂臥薪嘗膽、六十年の久しきに互る忍従刻苦を續けて今日に及んだ。斯る時機に滿洲事變は突發したのである。滿洲事變は日支紛争といふよりも、寧ろ皇國と聯盟否之を背後より操る列強との争闘であつた。國際聯盟は其無力を顧みず日支事變に

千與し、完膚なき迄に權威を失墜し、加之世界に於ける白人列強の既得權益擁護機關たる以外、何物にもあちざる事を暴露した。

皇國の聯盟脱退は、實に正義日本の不正邪惡に對する宣戰布告であつたのだ。

彼等は何が故に、滿洲國の獨立を斯くも死物狂で防止せんと欲したか？ 世界大戦後の民族自決主義は、彼等自ら提唱したモットーではなかつたか？ 彼等の便宜の爲めには、此のモットーは正義であり、彼等の利益に反する時は不正義となる、随分勝手な話だ。皇國は新興滿洲帝國と堅く提携し、茲に東亞平和の基礎は確立し、皇國の大陸に於ける國防線の經始は成つた。今や滿洲國は其國礎確立し、サルバドル國によつて承認せられ、ローマ法王は事實上の承認を與へ、列強は競うて滿洲國に權益を扶殖せんとするに至り、本問題當然な解決の曙光が見えて來た。最近日支接近の兆あるや、彼等は更に之をも阻止せんとしつゝある。理由は明白である。日滿支の經濟ブロック完成せんか、白人列強の東亞に於ける既得權益は、根底より覆され、白人の世界覇權の夢は、之を端

緒として崩壊を來すからである。國際聯盟始め列強は、支那の抗日を利用して、巧みに經濟援助の名の下に、自己の利權を獲得し、延て支那の國防を強化して、日支をして永遠に抗争せしめんことを企圖しつゝある。是は世界周知の事實であつて、全世界にセンセーションを起した所謂天羽聲明は、實に此の醜狀に對し、一矢を酬むんと欲したるものと考へられる。

列強の皇國を孤立に陥れんとする工作は、前述の如く進展しつゝある。一方我が商品には、雄々しくも目とを交し、世界的進出を遂げつゝある。邦貨の爲め、市場を席捲せられし英、蘭始め、諸邦は共同戦線を張つて、或は關稅障壁の樹立により、或は輸入割當制の採用により、皇國の經濟進出を阻止せんとしつゝある。英國等を中心とせし、聯盟操縦による、日本經濟封鎖の策動は、今や經濟的理由によつて著々と實施せられつゝあるのである。

斯く觀じ來れば、今や皇國が守内に宣明せし、正義觀に恐怖を抱き、皇國の正當なる發展を嫉視し、全人類の理想たる、共存共榮、人種平等の大旗を正視するを恥づる、利己的、獨善的、霸道國家放民族は、皇國を目して共同の敵として憎惡し、之を失脚せしめんと欲し、利害を同する國を連れて皇國に向はんとしつゝある。皇國は眞に榮國以來の危機に直面せりと謂ふべく、今や完全に四面楚歌の中にありと謂ふも過言でない。被壓迫、被搾取有色人種よりは、宛ら神の如く渴仰崇拜せられつゝあるも、其他の世界霸道列強は、正に皇國を見ること恰も大戰直前の獨國に對するが如く、否更に人種的反感と敵意とを加へたる上に於て、一層深刻なるものありとも考へらるゝのである。皇國は果して第二の獨逸を以て目さる可きものであるか、又第二の獨逸の運命を辿るべきや否や、これは皇國の前途に投せられたる二大課題である。

二、 國運日本の實相と列強の重圍

日本商品の海外飛躍

ムツツリーニ首相は、五月二十六日伊國下院に於て、

「近時、日本は歐洲の疲弊を尻目に、次第に國力を伸張しつゝある。今にして歐洲が覺醒せずんば、遂に日本の動的勢力の前に屈伏せねばならぬであらう」と警告して居る。

巴里のヴェユ誌は、恐る可き日本の進出と題し、

「日本の編製品、人絹、雜貨の進出は勿論であるが、更に、日本刃物は高關稅を突破して、刃物の本場たる英國にシェフィールド刃物の半値で侵入し、時計王國たる瑞西には、日本製の懐中時計、掛時計が進出し、ボヘミア・ガラスで有名なチェッコ・スロヴァキアには日本硝子が堂々進歩し、工業國たる英、米、獨に懐中電燈、電球、玩具等が怒濤の如く流れ込みつゝある」と述べ

伊太利のイル・ソール紙は

「フューメ日本綿布に占領さる」と特筆大書し、
英國のデリー・メール紙は

「二ポンド一〇シルの自轉車日本より侵入し、年に二萬臺は英國に輸入せられんとす」と大聲疾呼して居る。

何れも誇張に失する様であるが、列國が日本商品の進出に、悲鳴を揚げつゝある有様を遺憾なく述べて居る。

實際、電氣工業を誇る、獨國大柏林の夜を照らす電球が日本品であり、世界綿業の中心、英國ランカシャの紡績工の着るシャツが、日本製品であつたりする事實は、何と言つても現代の盛事と申さねばなるまい。

以下最近主要列強と皇國との間に展開せられつゝある、貿易戦に就て一瞥を加へて見よう。

日英貿易

日英貿易戦に於ける我が綿製品は、日本商品進出の大關であつて、最近三ヶ年間の綿

x x x x

織物の對英帝國進出狀況を示せば左表の如くである。

輸出先	年次	一九三二年	一九三一年	一九三〇年
英領印度		八〇、六五三 <small>千円</small>	四九、八六六	六一、二一六
海峡植民地		一一、二二九	五、二二二	六、二八三
南阿聯邦		五、三三八	五、四五〇	三、七五三
濠洲		四、八七四	二、八五六	二、四四一
香港		三、七五五	九、七六四	一八、二五一

英帝國市場に於ける日、英綿布の角逐(百萬方碼)

(参考)

輸出先	區分	一九三三年	一九三二年	一九三一年
日本	日			
英國	英			

品名	一九三三年	一九三二年	一九三〇年	一九三三年	一九三二年	一九三〇年
英領印度	四五二	四九六	六四五	六一六	四〇四	四〇八
海峽植民地	九六	二六	八二	三七	四一	二〇
東阿	一八七	一一二	七六	一三三	五三	一一
濠洲	五五	一四六	三六	一六七	二一	一一二
アデン	三九	?	六一	?	三五	?
香港	二九	一九	二三	五三	六三	三九
南阿	二六	一二二	三六	五二	三九	五五
パレスタイン	四	?	?	?	?	?
新西蘭	三	三七	一	四一	一	二八
加奈陀	〇・一	四五	〇	二七	〇	二八

八

重要商品(千萬圓以上の)の對英帝國輸出狀況

(參考)

品目	年次	單位	量			價格(千圓)		
			一九三三年	一九三二年	一九三〇年	一九三三年	一九三二年	一九三〇年
綿織物		千平方碼	九六四、四六六	六五九、九六六	六六五、九七三	一三三、七一〇	八四、六五二	一〇四、三九五
絹織物						三三、六九九	二六、〇五〇	三九、三七六
人絹織物						三三、九九六	二五、六八一	一八、五四八
綿織糸		百斤	一九〇、〇〇七	六三、三九七	一〇三、八五六	一六、五四一	六四、八六六	九五、二八
生糸		同右	一九、五五三	一六、一六〇	一〇、〇七三	一三、八八七	一〇、八七四	九、三二四
メリヤス製品		千打	六、八〇〇	五、六六五	七、七〇三	一三、五四八	一一、二二七	一九、〇四〇

貿易高は右の如くであるが兩國紡績事業の成績を比較して見ると左の通りである。

國名	一九三二年		一九三一年	
	紡績工場錠數	綿製品輸出高	紡績工場錠數	綿製品輸出高
英國	五、五〇〇 <small>萬錠</small>	六七億八千萬 <small>千方碼</small>	五、〇〇〇 <small>萬錠</small>	二十二億 <small>千方碼</small>
日本	二二〇	?	八〇〇	二十億三千萬

右表の如く大戰前英國は、總計五千五百萬錠、即ち全世界の約三分之一を保有し、六十億八千萬平方碼の織物を輸出し、世界市場を支配して居た。然るに一九三二年に於ては、錠數も減少はして居るが、多數工場の操業停止、又は短縮と低能率の爲め、僅かに二十二億平方碼を輸出するに過ぎぬ。之に反し皇國に於ては、今日英國の六分一にも達せぬ、八百萬錠を以て、英の二十二億に匹敵する、二十億三千萬平方碼を輸出しつゝある。換言すれば、英國の六分一の機械を以て同量の製品を得つゝあるもので、之は全く日本人職工の能率、工場經營及器械及混棉技術の優秀なるに比し、彼は保守的にして、依

然として、千八百年代の舊式器械を使用し、職工の技術並工場の經營法我に比し劣等なるに起因するものと言はねばなるまい。

右の如き有様でランカンシア紡績は、遂に日本紡績の爲め壓倒せられ、英國綿業の危機を叫ばれるに至り、日印、日英會商となり、日英會商決裂の結果、今回の輸入割當制の斷行による、對日經濟宣戰の布告となつた。

更に一般雜貨、即ちゴム靴、陶磁器、食料品、玩具、硝子製品其他の進出目醒しきものあり、遂に日本商品の見本を、議會壇上に迄持出して、日貨の安價にして之を放置せんか、遂に英國は世界より驅逐せらる可きを呼び、或は、英帝國經濟聯盟は、綿布、陶磁器、玩具等日本品の展覽會を催し、新聞紙は筆を揃へて日本品の廉價なる事を宣傳し、却つて邦品の進出を助成したる如き結果を招來する等、英國經濟界の狼狽振りを窺ふに足るものがある。其結果英屬領、自治領は謂ふに及ばず、南米、アフリカの各地方に到る迄、「日本品は安くて品がよい」といふことが宣傳せられ、愈、日本品躍進時代に拍車

をかけることになつたのである。

英國綿業貿易團體合同執行委員会は、去る一月五日ランシマン商相に提出したる覺書中に於て「若し日英商議失敗せば、政府は宜しく和蘭と協定を結び、日本紡績業の不正な競争に對抗し、協力して極東に在る英、蘭兩國植民地の防護に當る可きである」

と述べ、去る五月八日、下院に於て、保守黨議員ロックウッド氏は

「英國内に於て販賣せらるる日本電球及電氣器具の價格は到底、英國品の競争にならぬ。政府は如何なる對策を有するや」

と質問し、同じく保守黨議員ドゥアー氏は南阿に於て日本製帽子が、英國優良品とマークを押されて、販賣せられぬ事實を指摘する等、英國國上下の神経過敏なること驚くべきものがある。

右は單に數例に過ぎぬが、斯る形勢よりして遂に、我が綿布及人絹製品に對するランシマン商相の屬領、植民地及保護領に於ける輸入割當制實施の聲明となつた。右は一九二七年から三三年に至る平均數量を基準として輸入割當を適用せんとするものである。これに對しては英植民地又は屬領中にも一部の反對があり、又土人側に於ても異論ある可く、英國の放つた日貨排斥の矢が、どの程度迄日本商品に打撃を與ふるかは不明である。

る、が水は低きに流るる、如く、邦品は更に同種の産業を有しない他の英品の市場に殺到すべく、一方英自治領たる英領印度、濠洲、カナダ、南阿聯邦、馬來聯邦、ニュージランド、アイルランド等は本聲明の範圍外であり、就中、濠洲及びカナダは我國に對し出超國であり、英本國に從つて割當制採用の態度に出る如き虞はなからうと見られて居るが、其他の地方に於ても、將來同様の問題惹起するか否かに就ては逆睹し難きものがある。

我が對英帝國貿易の消長(單位千圓)

國名	區分		日本へ		日本より	
	年次	輸出	輸入	輸出	輸入	
英 國	一九三三年	八七、八四九	五九、六五六	五、八三〇	八三、五五八	七六、七六〇
	一九三二年	一一〇、三六七	二〇、七三七	二六、八六五	一三三、一六五	
印 度	一九三三年	二〇、七三七	二六、八六五	一三三、一六五		
	一九三二年	二〇、七三七	二六、八六五	一三三、一六五		

合計	ボルネオ	ラニュジド	マニラ	東阿	南阿	エジプト	カナダ	アデン	海峽植民地	香港
五五九、八四四	一二七	六四五三	五、四一六	三三、一七四	三六、七四〇	五五、六〇七	六、五八〇	七、一九三	四六、一三三	三三、四一九
四二六、五五三		三、九九三	三六、八九五	一五、七六〇	一六、四一八	四一、八七七	八、五六三	八、三〇七	二五、五四九	一八、〇四二
三〇九、三九六		一、九六七	一八、四〇五	一〇、八六七	一九、二八三	二二、八二九	一三、〇六七	四、八〇九	一九、二一九	三六、七五四
六三九、二八〇	五、七七二	二、三九九	二〇、五八六	一四、三五六	五、五三	二六、四五五	四六、八九二	一〇	三八、七七一	二、〇九三
四三三、〇三三		一、四七一	一三、二七七	三、四一四	二、六三六	一九、七八八	三九、五〇五	一	二五、三三六	九七七
三六七、四九三		一、四〇〇	一三、三三七	二、二六三	一、三三三	一三、五六八	三五、六七三	二二	二、八五八	四九九

日蘭貿易

次に目下は蘭領東印度ジャバ島のバタヴィアに開催中の、日蘭商會に關聯する、日蘭經濟戰に就て簡單に述べて見よう。

蘭領印度を市場とする國は日、和、新嘉坡、英、獨、米等であつて、大戰前、日本は蘭印貿易額の一・六%を占むるに過ぎなかつたが、大戰後激増し、一九三〇年には、和蘭に次ぎ第二位となり、一一・六%を占め、一九三二年には二二・三%を占め第一位となつた。最近十數年間の日蘭貿易額を示せば左の通りである。

日・蘭貿易額(單位千圓)

年次	區分	
	輸	入
一九一、三、三年	五、四一九	三七、三八九
一九二、二、二年	四七、四〇一	七一、七五八

一九二三年	四〇、五九一	七二、九五五
一九二四年	五九、三三一	九二、四〇一
一九二五年	八五、五五七	一〇三、三七三
一九二六年	七四、七五四	一〇三、〇七七
一九二七年	八二、五八一	一〇三、七七五
一九二八年	七三、四一四	一一二、九一七
一九二九年	八七、一二五	七七、三四五
一九三〇年	六六、〇四七	五九、九八三
一九三一年	六三、四五〇	四六、〇八〇
一九三二年	一〇〇、二五四	四〇、四〇九
一九三三年	一五七、四八七	五五、七〇九

即ち日・蘭貿易は、長年日本側の入超を續けて來たが、最近五箇年間に至つて始めて日本側の出超となり、特に一九三二—三三年に於て、大出超となつたのである。この原因は、蘭領印度の商權を握つて居た、支那商人即ち華僑が、日貨排斥を行つたのに乘じ、日本商人が之に代つて正札主義により活躍を始めたこと、爲替安と、生産費の低廉に乘じ、土人の嗜好に適する邦貨が、進出するに至つた爲である、就中綿製品の進出は大出超の最大原因である。

即ち昨年は我輸出一億五千七百萬圓に對し、蘭印よりの輸入、僅かに五千五百萬圓で、一億圓以上の輸出超過であり、我國にとつては米國、印度に次ぎ本邦第三位の輸出市場である。

就中我綿製品の著しき進出の結果、從來相當盛であつた、和蘭及英國品は漸次地盤を失ふに至つた。

綿布の蘭印輸入を日英蘭三國に就て比較するに

國名	年次	一九三二年	一九三一年	一九三〇年
日本		三〇五、六九〇 <small>千ヤード</small>	二五八、四三六	二二一、五七六
英國		三八、一六〇	四六、三三七	八九、〇三二
和蘭		六二、六五五	一〇八、五九二	一三一、三〇〇
總輸入高		五五八、四七七	四七七、六二二	五二〇、〇八六

綿布國別輸入高(サロン類を除く)(單位千盾)(一盾は時價約二圓三十錢)

國名	年次	一九三二年	一九三〇年	一九二九年	一九二八年
日本		三八、〇三七	三九、一八二	四七、二三五	四〇、五〇五

和蘭	英國	海峽植民地	伊太利	瑞西	支那	合計 (其の他を含む)
二一、〇〇三	九、九〇七	五、〇四六	一、九八八	一、三五六	一、一七〇	八〇、四四九
三一、一六二	二三、一六五	六、二九八	四、八三一	一、八七九	一、四二〇	一一一、三四一
四一、六八八	三九、七九四	七、四八六	八、九二一	三、八四一	一、八一六	一五六、四九一
四一、三七五	四五、四五九	六、七六四	一〇、六一四	六、六〇一	二、三一六	一五七、六七八

右の如く、日本綿製品は約五〇%を占めて居る。

人絹織物の輸出増加率に至つては更に目醒しく、一九三一年には日本品は八〇%以上を占め、瓜哇及マヅラに於ては、九〇%に達し、斷然英、瑞西、伊、和、佛等を壓倒して居る。

最近の世界的經濟不況と、爲替安の國よりの輸入等の爲め、和蘭は極度の産業不振と、財政の不安に見舞はれ、蘭印亦其影響を蒙るに至つた。是に於て和蘭本國は、一九三二年一月非常時輸入制限令を公布し、蘭印亦一九三三年以降非常時輸出入制限令を公布するに至つた。

日本關係主要品目はセメント、ビール、サロン、晒綿布等である。

更に蘭領印度を唯一の市場とする、和蘭本國ツウエンテ棉業者は、苦境打開の爲、救済方を政府に願出で、本年一月十日、日、蘭印會商開催方を申出で、六月より其實現を見るに至つたものである。

日蘭會商の成果に就ては、豫測を許さざるものがあるが、蘭印は英國の從來よりの市場であり、海軍力を有せず、通商保護を英海軍に委倚せる和蘭としては、英國の要求を無下に排除し得ざる關係に在り、従つて和蘭の對日貿易戦の裏面には、英國の使嗾と暗躍がある以上、結局本問題は日英貿易戦の延長と見るの外なく、前途樂觀を許さぬもの

がある。但し土民は民族近似せる日本に對し、絶大の好意と尊敬の念を有し、又安價にして優良なる日貨を歓迎しつゝあり、左に掲ぐる記事は其の反映と見ることが出来る。

蘭印國民參議會經濟財政分科會は、六月三十日通商政策に関する報告を行ひ、特に綿布輸入割當制が、土民大衆の生活を脅かす事實を指摘してゐる。其要旨を左に掲ぐれば

一、オランダ本國の工業が何故に蘭印市場を失つたか、その原因はオランダ工業界が自ら悟るべきだ。オランダ工業が押されてゐるのは圖爲替安のためばかりでなく、工業そのものが近代的企業方法の適用に立遅れ、同種の商品ではとても日本品と競争出来ないからだ。

一、蘭印政廳は土人の生産力を刺戟して、經濟狀態の改善を圖らねばならぬ、砂糖工業の廢されたところには、棉花を栽培させるやうな措置を講ずべきであ

る。

一、土民が極貧窮乏の生活を續けてゐる事實に鑑み、必需綿布は出来るだけ安く手に入れ得るやうに取計らはねばならぬ、この點から結論すれば綿布割當制は土人大衆の損失である。

X X X X

對佛貿易

對佛貿易は左表の如く

區分	年次		
	一九三二年	一九三一年	一九三〇年
佛國へ輸出	二一、三五八	一五、七七四	二六、三〇二
日本へ輸入	二一、〇九四	一一、四〇七	一六、六三五

輸出入共に二千萬圓程度であつて、大した問題となる筈はないのであるが、昨年以來本國並にアフリカ植民地に於

ける、邦品の進出が問題となり、昨年十二月下院關稅委員會に於て、エーナツク商相は「日本品の進出に甚 危險に就ては、關稅政策を考究するつもりである」と述べ、本年一月二十一日、リヨン市商業會議所總會に於ては、佛本國及植民地への日本品輸入に對しては、輸入割當制を適用すべきを決議し、司會者モーレル・シャール氏は「日本品の競争は、佛國に取つて實に死活の問題である。ダンピングは一時的であるが、日本品の競争は永久性を有する故に、其影響する所は遙かに大であると聲明した。

又五月一日リヨンに開催せられた、國際絹業大會に於ては、日本品禁止の爲めには、關稅引上げ效果なく、輸入禁止の割當制實施を必要とする點に於て一致を見、日本品排撃の具體案を作製することとなつたと新聞は傳へて居る。

尙ほ最近に至つて、邦品の進出更に著しき爲め、佛國政府は、近く本國及植民地の聯合經濟會議を開催して、日本を中心とする一般外國商品に對する對策、其他を協議すべく準備中であると傳へられて居る。

白耳義に於ては一月末紡績聯合會は、日本品の進出に就て左の如き報告を發表して居る。
日本綿布は其價格の低廉なる爲、英國の有する地位を忽ち奪取してしまつた。日本品の優越性は、單に通貨の低落のみに起因するのではなく、合理化された産業組織と、低廉な賃金に満足せる、聰明にして良く訓練せられたる、労働者の存在に基くものである。幸にして、白耳義本國市場は、未だ日本綿製品の侵入を受けて居ないが、現在アントワープで取引せられつつある、日本時計及自轉車の低廉なることは、吾人に多大の不安を與ふるものである云々

x x x x

對米貿易 日米兩國に關する限り、貿易は有無相通するの關係に在る、貿易の總額は左の如くである。

區分	年次		
	一九三二年	一九三一年	一九三〇年
米國へ輸出	四四五、一四七	四二五、三三〇	五〇六、一一二
日本へ輸入	五〇九、八七三	三四二、二八九	四四二、八八一

我よりは四億圓内外の生糸を輸出するを主とし、彼よりは、三億圓（これは昭和七年の輸入額で、五年は一億七千萬圓、六年は一億五千萬圓）の實棉及繰棉を筆頭に、織、機械等を輸入しつゝあるのであるが、一昨年頃より日本製ゴム靴及電球の進出の爲め、

一部營業者の悲鳴となり、邦品の競争が問題視せらるゝに至つた。彼等の言ふ所に依れば、一昨年度に於て、日本電球は全米國の消費量の二割を占め、同年九月中に輸入した電球は、千八百萬個に達したと稱し、昨年に入つて最初の九ヶ月間に、無慮七千九百萬個を輸入し、其結果二千人の失業者を出し、クリスマス用電球は悉く日本品に獨占せられたと稱して居る。

上院議員リード氏の提出したる、産業復興法に對する修正案は

「外國よりの輸入品にして、不正手段に依る競争を以て米國內の産業を脅成するものある場合には、大統領は右外國品の輸入を禁止することを得」

とあつて、右は日本商品の輸入防遏を目的とせる事は明瞭である。今回英國の割當制實施に伴ふ、日本商品のラテン・アメリカ方面への進出に關聯し、米國當局は非公式に左の如き意向を洩して居ると傳へられて居る。

日本品の進出の結果、互惠協定によつて米國とラテン・アメリカとの通商關係を強化せんとする、米大統領の計畫に重大な齟齬を來した事は事實である。アルゼンチン大統領は、議會に對するメッセージに於て、日本及米國と通

市場		市	
	計	其他	アフリカ
	七二、七八〇	一三、二九三	四三、五六〇
	四〇、一〇二	四、三九九	二八、四五六
	一七、三〇六	一、九〇七	一三、〇六一
%	一六%	一一%	七%

x x x x

日本商品
の海外飛躍
の原因

以上は日本商品海外飛躍の概観を述べたに過ぎない。要は、日支事變に伴ふ日貨排斥を蒙つた邦品が、列國經濟不況の間隙に乘じ、技術の優秀、生産費の低廉、圓價暴落の好條件の下に、海外に飛躍し、列國の市場を席捲し、列國貿易に大脅威を與ふるに至つたものである。尙ほ獨國ヒットラーが猶太人を追放した事が間接に影響し、獨國商品に代りつゝあることも注意すべきことの一である。

然るに、我が製品は、所謂輕工業製品であつて、就中、綿製品、人絹、雜貨類等が偶々英國輕工業品市場たる、印度、南洋、アフリカ方面に進出し、英品を驅逐するに至つた。英國は各種の條件不利なる爲め、自由競争に依つて對抗するを得ず、遂に對日經濟宣戰を布告するに至つたもので、獨力之を行ふも効果なきを見、和蘭と協同し、更に日本品の脅威を感じつゝある列國を誘つて、對日協同戰線を張らんとしつゝあるものと觀察せられるのである。

彼等は日本商品の進出を以て、不正なるソシアル・ダンピングによる通商戰であると誣告し、同志を糾合することに努めて居るが、其態度たるや卑劣も甚しきもので、日本品の廉價なる原因は、白耳義紡績聯合會の言ふ如く、合理化されたる産業組織と優秀なる勞働者の技術と、爲替安の關係であることは、外人と雖も心ある人の認めてゐる所である。

アルノー・パース博士の如きは、日本人は英人の如く傳統に執着せず、進歩せる機械と技術とを採用するに機敏なることゝ、紡績工場の社會的施設の完備せる事を嘆賞し、

日本労働者の生活程度は國民一般のレベルより見て決して甚しく低劣でないことを述べて居る。

又國際労働事務局のモーレット氏は去る六月一日の第六十七回理事會に於て日本労働視察の結果を報告して曰く、

この豫備的報告書を結ぶに先立つて、私は日本の全産業界——雇傭主及び労働者、竝に日本政府をも含めて——が深甚なる關心を寄せてゐるかに見える、二つの問題に對して注意を喚起したい、この二つの問題は幾度となく私に向つて質問せられたのであるが、私はこれに對して次の通り答へることが可能であり、また正當でもあると考へた。

第一の問題は次のやうな方式にすることができよう——日本における賃金は、その他のすべての産業國に於て支拂はるゝものと比較して、眞實に極めて低廉なのであらうか？ 私は答へて曰く、私の第一印象によれば、且又私の訪問した企業及びそれについて情報入手し得た企業については、國價の下落に基因する日本の極めて低廉な生計費を考慮に入れるならば、廣汎且つ多大なる低劣さがあるやうには見受けられないと

生活標準を測定するためには、生計費の低廉を考慮に入れるべきであり、また、衣食住並に娯樂についての日本民衆の慣習、換言すれば、日本人の生活様式をも考慮に入れることが必要である。兎も角、産業賃金の總體な比較研究——勿論、このやうな研究を行ふことはできなかつたが——を行ふ場合には、日本の産業労働者についてだけでなく、農民、

給料被傭者及び官吏をも含む人口全體について、以上の二要素を考慮に入れるべきであらう。

第二の問題はソシアル・ダンピングに關するものである。日本の輸出貿易がソシアル・ダンピングによつて利益を得つゝあると云ふ實證があるかどうか？ この問題に對する私の答は次の通りであつた。

まづ第一に、未だ曾て明確に定義せられたことはないのだが、「ソシアル・ダンピング」と云ふ言葉の眞の意味は何であらうか。私の視るところでは、それは商業上のダンピングとの類推によつて定義することができ、商業上のダンピングとは、原價に適度な利潤を加へたものよりも低い價格で商品を輸出すること、竝に原價に上述の適度な利潤を加へたものよりも高い價格で同じ商品を國內市場で賣ることである。

これから類推して、ソシアル・ダンピングとは、輸出品を造る企業に於ける労働條件を低劣にすること、若くはそれがすでに極めて低い水準に在る場合には、このような低水準を維持することによつて生産費を切下げ、かくして自國製品を輸出する機會を増加することである、と言ひ得るであらう。

このことは労働者の同意を得て行はれることもあれば、彼等を強制してこのような條件を押付けることによつて行はれる。

以上がソシアル・ダンピングの意味であるとするれば、日本に於て私の訪問した輸出向の工業的企業には、ソシアル・ダンピングは存在しないと謂はれるであらう。事實大部分輸出向の品を製造する、新しい大企業に於てこそ、労働時間、休日賃金、保健、安全等々を含めて労働條件は最高標準に在るのである、あらゆる産業國の場合と同様に一般

の労働状態は、國際労働機關の基礎たる社會進歩の原則に従つて、將來において益々改善せらるべきことは勿論であるけれども、上述の諸工場は決して成績劣等なるものではなく、その大部分は日本に存在する最高の標準を保つて居り、他の工場の模範となつてゐる。

他の國々と同様、日本に於ても労働者の要求一つある労働条件の改善は、他の國々に於けると同じく、一部は國內特有の事情に、一部は全世界に共通なる事情に依存するものである。

これらの事情は私の終結的報告書に於て検討せられるであらう。私の訪問した種類に屬する輸出向大企業にひろく行はれる制度は、過去に於て右のような改善の障礙となつたとは思はれない——むしろ、事實はその反對であつた——また、將來に於ても改善を妨げるであらうとは考へられない云々

又國際労働局長バトラー氏は第十八回國際労働總會に於ける報告中先づ、日本の所謂ソシアル・ダンピングに關聯し、高橋蔵相のインフレーション政策が、日本の生産の巨大な増加と、其の輸出貿易の驚くべき躍進の一要因であると冒頭し、低い労働費と、最も最新な機械設備と、近代的に組織せられる日本の産業が世界市場に於ける最も恐るべき、競争者たらしめたと述べて居る。

是等に見るも英國等の報告は、日本を陥れんとする爲めにするものであることが明瞭である。
以上の如き日本商品の進出に對し、列國の今日迄取つた對策を表示して見ると左表の如くである。

日本商品輸入防壁事情一覽表

國名		本邦關係商品名	防壁手段	税種目及税率	改正理由及備考
支那	支那	綿織物、セメント、海産物、米粉、紙、電球、木材、石炭、雜貨類	新度量衡制實施(上海)政府の命令に依り昭和九年二月一日より新度量衡制(メートル)制を實施す		日支關稅協定期滿期(昭和九年五月)不當廉賣法、原產地標記法等決定
英領印度	英領印度	陶磁器、電球、玩具、セメント、蠟燭、硝子、紙、人絹織物、雜貨類			
英領馬來	英領馬來	綿織物、ゴム、靴、絹、人絹織物、コンダンス、ミルク			

(外務省情報に依る、四月末日現在調)

(財政經濟時報所載)

伊大和	和蘭	土耳其	希臘	米國	カナダ	メキシコ
陶磁器、綿織、紙類、菓子類、胡椒、大豆、胡麻油、菜種油、大豆油、ゴマ油等	綿織品、綿布、メリヤス類、毛織物、電球、靴	綿織布、ゴマ靴、陶磁器、玩具、電球等	昭和八年六月以降本邦品輸入に對する爲替取組禁止	ゴマ靴、ゴマ靴、カン	麥粉、麵粉、鉛筆、メリヤス製品、陶磁器類	乾物、鹽漬、罐頭魚介類、魚介類及野菜類、醬油、乾取糖、ゴマ製品、ゴマ靴、絹及人絹帽子、菓子類等
輸入割當、輸入禁止、爲替管理、關稅引上	輸入割當、輸入禁止、爲替管理、關稅引上	輸入割當、爲替管理	輸入割當、爲替管理	關稅引上	關稅引上	關稅引上
昭和九年一月二十九日公布	昭和九年一月二十九日公布	昭和九年一月二十九日公布	昭和九年一月二十九日公布	關稅法伸縮條項、不當廉賣法、産業復興法、英帝國特惠增大	關稅引上	關稅引上

アルゼンチン	關稅引上	昭和九年三月一日公布、三月一日實施
輸入割當、輸入禁止、爲替管理、關稅引上	關稅引上	昭和九年三月一日公布、三月一日實施

以上は最近に於ける我が商品の飛躍と、列國の之が阻止對策に汲々たる有様に就て述べたのであるが、茲に吾人の留意を要することは、我が商品の飛躍は、主として綿製品、人絹、雜貨等の所謂纖維工業及輕工業の一部に限られたもので、我が産業が全面的に英米に追及するが如き飛躍を遂げ、又我が貿易が全般的に異常の發展をしたと考へたならば、それは大きな誤りであるといふことである。我が産業は纖維工業に於てこそ、英國と匹敵する地歩を獲得したのであるが、重工業に於ては依然として英、米、獨、佛等の敵ではあり得ない。又貿易に於ても、遺憾乍ら依然として加奈陀、和蘭、白耳義の如き二流國の仲間たるの域を脱してゐないのである。(次表参照)

列國の貿易 (單位百萬圓)

區分 國名	輸入			輸出			國民一人(昭和7年) 當り	
	1930年	1931年	1932年	1930年	1931年	1932年	輸入	輸出
日本	1,507	1,206	775	1,431	1,118	763	11.7	11.5
米國	6,248	4,194	2,669	7,586	4,771	3,163	21.5	25.4
英國	9,344	7,262	4,585	5,573	3,524	2,566	99.6	57.7
獨逸	4,967	3,215	2,230	5,414	4,399	2,743	34.0	41.8
佛國	4,127	3,317	2,344	3,367	2,391	1,548	36.1	36.9
加奈陀	2,023	1,210	799	1,777	1,166	872	76.9	84.0
英領印度	1,376	918	699	1,850	1,113	714	2.0	2.2
和蘭	1,950	1,526	1,048	1,386	1,058	682	130.0	85.8
白耳義	1,734	1,328	913	1,469	1,278	827	112.8	102.1
伊太利	1,829	1,229	872	1,279	1,078	719	21.0	17.3
亞爾熱丁	1,230	690	434	1,037	856	663	37.2	56.8
蘇聯邦	1,093	1,141	722	1,069	837	582	4.4	3.5
支那	1,015	884	651	555	402	305	1.5	0.7
滿洲聯邦	846	287	289	816	626	533	44.5	82.5
チエツコ	932	697	444	1,038	779	436	30.2	29.5
瑞西	976	854	766	674	516	308	194.8	75.5

國際聯盟統計月報による。金本位制の國は平價換算。金本位離脱の國は對米爲替其年平均相場を以て金圓に換算す。本邦分の昭和七年分は對米爲替相場により金圓に換算せり。

又列國が此の如く邦品の進出に悲鳴を擧げる所以は、列國今や産業の不振、貿易の萎縮(次頁の表参照)に、嚙ぎつゝある際に、獨り邦品のみは、優越せる條件に恵まれある爲め、列國の苦惱を尻目にかけて、他國に比し不況の影響を受くる事少く、品種によつては却つて發展するものもあるといふ、列國と反對の軌道を歩みつゝある我國の貿易状態を見て、之を嫉視し、一方、邦品が彼等の一部産業を壓倒し、之が爲め失業者を出し、工場を閉鎖する等の影響を如實に與へたる爲め、速かに聲を大にして邦貨に壓迫を加へ來つたものである。

又一面には斯る状態が一時的現象なりとせば、彼等も忍び得るとしても、永續の可能性ある爲め、今にして日本經濟の發展を阻止せずんば、遂に、向上發展の軌道に乗つた日本産業は、那邊迄行くやも知れずとの、將來に對する恐怖觀念も加はり、更に聯盟に於ける、日本制裁の爲めの經濟封鎖手段、といふ如き觀念も之を促進する上に役立ち居るものと考へるのである。

是に於て今後の對策としては、我が産業の一層合理化を圖ること、更に新市場の開拓に努力し、一方輸出統制を行ふと共に、世界のブロックに對立すべき日滿支經濟ブロックの形成に依つて對抗すべきであらう。

列國貿易萎縮の狀況左表の如し

列國貿易萎縮割合(一九二九年を一〇〇とす)(國勢統計による)

國名	年 區分					
	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	
日 本	輸	一〇〇	六八	五三	六五	八七
	入	一〇〇	六九	五六	六四	八七
獨 國	輸	一〇〇	六六	五六	三五	三二
	入	一〇〇	七六	五〇	三五	三二
伊 國	輸	一〇〇	八〇	六七	四五	三九
	入	一〇〇	八〇	五四	三六	三五
佛 國	輸	一〇〇	八六	六二	三九	三七
	入	一〇〇	九六	七九	五九	五三

國 名	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
米 國	一〇〇	七四	四六	三二	三三
英 國	一〇〇	七六	五四	五〇	五〇

人口増加と日本移民排斥問題

移民排斥の歴史と現況

ムツソリーニ首相は五月五日、ポポロ・デイタリア紙上に於て、黄色人種及混血人種が、白色人種の五、六倍の率を以て増殖しつつある事實を指摘し、此状態が續けば二十年後には、東京は世界最大の都會となるであらうと結論して居る。

實際日本人の人口増加率は列強の首位に位し、内地人口のみに就て見るも、明治五年の三千三百萬より昭和七年には六千六百萬となり、六十年間に人口は倍加して居る。昭和二年乃至六年に至る五ヶ年の内地人口平均増加八十八萬人であつて、昭和七年以來九十萬乃至百萬の増加である。

今後二十數年にして一億萬人に達すると言はれて居る。今列國の人口増加を示せば左

表の通りである。

國名	人口増加 (昭和2— 6年平均)
日本(内地)	876 ^{千人}
朝鮮	309
臺灣	115
計	4
日朝臺灣	1,304
米國	* 664
英	99
佛	55
獨逸	283
伊國	428
瑞典	* 13
丁蘭	* 29
和蘭	101
白耳義	* 39
瑞西	30
埃國	24
チエツコ	111
西國	244
歐蘇	x 623
加奈陀	128
智利	x 71
アルゼンチン	x 173
濠洲	* 74
印度	* 2,330
埃及	* 262

(昭和八年版 日本國勢圖會に依る)

四四

日本人口は、海外領土を合すれば今や九千二百萬人に達し、人口密度の大なること列強中の上位に在り、可耕面積に對する密度は世界に冠たり。(左表参照)

(註) * 昭和元—五年平均
x 大正十四—昭和四年平均

各國の面積及人口(昭和五年現在)

區分	面積 (千平方)	人口 (千人)	密度 (千平方)
日本	675	92,220	137
内地	382	64,700	170
本洲	1,137	26,443	23
那國	9,966	426,398	43
度洲	38,547	499,414	13
陀國	244	45,987	188
佛國	4,675	352,370	75
本國	7,704	6,478	0.8
本國	9,557	10,290	1.1
本國	12,492	107,938	9
本國	551	41,800	76
本國	469	64,484	137
本國	21,176	161,000	7.6
本國	2,560	43,594	17
本國	310	41,100	134
本國	837	24,573	29
本國	503	23,581	47
本國	2,185	15,044	7
本國	93.1	6,659	72
本國	2,470	21,577	8.7
本國	80	8,092	270
本國	2,085	69,144	33
本國	34	7,921	233
本國	448	6,142	14
本國	386	2,812	7.3
本國	388	82,150	83
本國	41	4,077	99
本國	84	6,722	80
本國	93	8,684	93
本國	140	14,735	105
本國	295	18,025	61
本國	9,683	138,056	14
本國	7,839	123,630	16
本國	8,525	41,079	4.7
本國	742	4,294	5.8
本國	2,793	11,447	4.1
本國	1,969	16,550	8.4
世界總計	148,276	2,012,800	16

右の勢は必然的に邦人の海外發展となつて表はれなければならぬ。最近に於ける在外邦人數を表示すれば左の如くである。

國運日本と列強の重慶

四五

年次	1913年	1920年	1925年	1930年	1931年
州東	48.9	75.8	93.4	120.0	124.8
南洋(委)	—	3.2	7.7	22.7	28.0
洲那	51.4	86.4	98.3	112.7	135.5
支那	21.7	57.8	49.0	53.6	53.4
英領馬來	5.2	7.1	7.6	7.0	5.9
蘭領印度	2.9	4.1	4.5	6.8	6.9
比律賓	5.3	8.6	10.1	19.7	20.3
米本國	80.8	123.4	133.6	104.0	102.9
布哇	90.8	113.4	128.0	144.3	146.8
加奈陀	12.0	18.6	20.0	20.2	19.6
メキシコ	2.7	2.2	4.0	5.9	5.8
ブラジル	15.5	35.6	55.5	119.7	132.7
アルゼンチン	0.7	2.2	2.7	4.8	5.1
ベル	5.4	10.9	11.8	20.7	21.1
一洲	6.7	4.6	3.8	3.5	3.5
洲洲	1.2	2.4	3.4	3.7	3.8
他	7.5	11.3	6.7	8.6	9.
總計	358.7	568.1	640.1	777.9	825.1

圖六

然るに皇國移民が優秀なる素質を有する上に、勤勉であつて隨所に成功するや、列國は皇國移民の經濟的勢力獲得と、不同化とを理由として、漸次我が移民に對し門戸を閉鎖するに至つた。其根本原因は、皇國の隆々たる國運の進展に對する恐怖に在ることは察するに難くない。

x x x x

止本滿洲の
移民日禁

滿洲の邦人排斥は、一八九六年頃クインスランド州が日本移民を禁止せんと企てたのを嚆矢として、一八九七年ロンドンに於ける植民會議に於て、チェンバレン植民大臣の教育資格による移民制限の提案に基き、一九〇一年有名なる滿洲有色人種入國禁止の規定となつた。

右に依つて

官吏の指定する、ヨーロッパ語五十語の文章を、官吏の面前に於て書き得ざる人は入國を禁止することゝなつた。

之は表面上何でもない様であるが、實質的には、英、佛、獨語に限らず、衆人の知らざる國語の問題を課する結果、東洋人にして此試験に合格する者は皆無となつたのである。此の亂暴極まる規定に對し、日本政府は屢、抗議したが、常に一蹴せられて目的を達しなかつた。

一九〇四年日濠紳士協約なるものによつて、學生、商人若くは旅行者に限り、日本政府の發し、濠洲政府の裏書せる旅券を有する者のみ、十二箇月を限度とし、濠洲に入國し且つ滞在することを許可し、前述の書取試験を要せざる事となり、更に一九一六年右の期間を請願に依つて延長し得る規定が附加せられた。

後述する一九二四年米國の移民排斥法は、極端に苛酷なものであるが、濠洲移民禁止法も決して之に劣らない。最近レーサム外相が日本に對する一億五千萬圓の輸出超過維持の爲め、親善使節として來朝した事と對比して、皇國民の抱く感想や如何？

x x x x x

米國の日本移民禁止

米國に於ける日本移民は、最初は年一千人位であつたが、一八九九—一九〇〇年頃より激増し、一九〇六—一九〇七年には三萬人を突破する勢となつた。其狀況左の如くである。

一八九六年	一、五二六	一九〇三年	一四、二六四
一八九七年	二、二三〇	一九〇四年	一〇、三三一
一八九八年	二、八四四	一九〇五年	一三、八三五
一八九九年	一〇、六三五	一九〇六年	三〇、二二六

一九〇三年頃より日本移民制限法案が中央議會の問題となり、一九〇五年には桑港に日本人排斥協會なるものが出來た。一九〇六年頃日本學童隔離（歐洲人學童と區別し他の學校へ送ること）といふ形式で現はれた。

一九〇七年日本人迫害、營業妨害事件があり、同年には日米紳士協約なるものが出來て、再渡米者、在米日人の呼寄せる父母妻子、米國に財産關係を有する者の外、日本か

ら自發的に入國せしめぬといふことになつた。

此の紳士協約によつて日本移民は急に減少した。が依然として三千乃至一萬人位の渡米者はあつたのである。

斯くて右協約に満足せぬ排日家は、絶対に日本移民の禁止を迫り、加州排日協會なるものを造り、中央の上下兩院を動かし、終に所謂一九二四年の移民法が通過し、日本の抗議にも拘らず、「米國市民たり得ざる外國人の入國を禁止す」といふ事となり、再渡航移民のみに限らるゝことゝなつた。

斯くして年々三萬人を送りつゝあつた米國移民は遂に根絶するの悲境に立至つたのである。

x x x x x

次は目下問題となりつゝあるブラジルの移民制限問題である。

ブラジルの
移民制限

ブラジルに於ける在留邦人は、現在約十三萬人、年々の渡航者は最近二萬人を突破する

の状況である。(一九三一年—四、八四六人、一九三二年—一四、一三九人、一九三三年—二二、一五二人)

最近同國新憲法制定に伴ひ、外國移民を制限することゝなり、五月二十四日憲法審議會に於て、移民制限法案が、一四六票對四一票の多數を以て可決せられた。右に依れば

出身國の如何を問はず、ブラジル領土内に入國する移民は、法律の定むる制限内に於て自由とす。但し各國移民の一年の入國數は、當該移民の最近五十年間にブラジルに定着せる總數の二分を超ゆるを得ず。

とある。

五月二十七日サンパウロ發電報によれば日本の移民數は年約二千八百名といふ事に決定したとの事である。ブラジルが日米間の移民問題に基因する、不快なる關係の殷鑑に省みる所なく、此舉に出でたる事は、兩國々交の上に暗影を投ずるもので遺憾の至りである。

x x x x x

列國移民

以上の如く、今や世界の隅々に至る迄「日本人入るべからず」の禁札は高々と掲げられて居る。然るに日本人の海外に在る人口は百萬と號するも、實は現在八十數萬に過ぎない。又年々の移民數は約二萬人であるが、歸國移民數が一萬餘あるので、差引多い年で五六千人の移出に過ぎず、之を一年の人口増加百萬人に比すれば眞に九牛の一毛に過ぎない。

之に反し、支那の海外移民たる華僑は一千萬人と號し、實數に於ても九百萬は下るまいと言はれて居る。

最近移民の制限せられたブラジルに於て、邦人數は僅か十三萬人に過ぎないが同國に於ける、過去五十年間の各國別移民入國數は左の如くである。

國名	入國數	今次移民制限による數 (二%)
日本	一四二、五〇〇	二、八四七

伊國	蘭國	西國	獨國	露國	埃國
一、四〇一、七〇〇	一、一四三、二〇〇	五七五、八〇〇	三三四、一〇〇	一〇六、七〇〇	八四、四〇〇
二八、〇三五	二二、八六三	一一、五一六	六、六八二	二、一三三	一、六八七

即ち右に由つて見るも、邦人の排斥は數の増大のみが必ずしも原因でないことが了解せらるゝのである。邦人移民非難の理由は、米國勞働組合あたりの唱へた「日本人は低賃金で長時間勤勉に働く、それに白人よりも生活程度が低い。これでは結局白人は競争に叶はないばかりでなく、生活規準を引下げねばならぬ結果となる」といふこと、又カリフォルニアの農園等で唱へた「日本人は女も子供も働く、之では女に働かせぬ方針の、

米國農民は競争出来ない」又濠洲では、「勞働者の生活を向上し、其樂天地を造らんとしつゝあるのに、低賃金、低生活の東洋人を入れることは生活の擾亂となる」といふこと等である。ブラジルでは「日本人は同化し難い人種であり、優生學の見地から見ても、劣悪な人種である」と言つた。成る程日本人は外形的には洋装をし、英語なりスペイン語なりを語る、然し内面的には飽く迄、祖國を慕ひ、日本精神を保持し、祖國に忠ならんとする傾向が他の人種に比して強烈である。然し之は表面上の理由で、裏面に於ては、コーヒー事業の不振と邦人の他の方面への進出とに基因し、將來多數の邦人の入國することに脅威を感じたること、日本の進出を阻止せんとする英米の暗躍が、與つて力ありと見られて居る。

日本人が優生學上劣等だと言ふ如きは爲めにする誣言であつて、之に對し我が政府は「日本人位同化し易い移民は稀であり、加之教養あり勤勉で、農業に従事しても技術の優秀なること各國移民中其比を見ない。サンパウロ州の發展は、實は日本移民努力の賜

ではないか、人種の劣悪云々は言はれなきことで、最近の日本の發展は優秀人種なることを如實に證明して居るではないか」と抗議して居る。

之を要するに列國の排日は、日本人の生活力の優越に脅威を感じる列強の防禦策である。而も彼等は未だ開拓せられあらざる廣大なる土地を擁し、勞せずして安易なる生活を得つゝある。濠洲は僅か〇・八、加奈陀は一・一、米國は一四、ブラジルは四・七であつて、今後數百年を経るとも、彼等白人は何等生活の痛痒を感じない。之に反し我國は人口密度一三七で世界第四位、可耕面積に對する人口密度一、一一二人で世界第一である。(左表参照)數百年は愚か今後數十年にして、我が國土は人口を抱擁し得ざるに至らんとして居る。

人類は各、生存の權利を有して居る。或る民族にのみ廣大なる地域を與へらる可き天理は存在すべからざるものである。此の不合理此の不正義を是正することは、全世界人類幸福の爲め、我が大和民族に課せられた大使命ではあるまいか？

列國耕地面積と人口密度

國名	耕地面積 (平方軒)	人口密度 (一平方軒)	農民一人當 耕地面積 <small>ヘクタール</small>
日本	59.0	1.112.1	0.45
英國	50.0	920	3.9
佛國	221.6	188	2.7
獨逸國	204.9	318	2.1
伊國	137.8	298	1.3
白國	12.3	657	2.0
和國	9.1	885	1.4
米國	1.384.0	93	12.8
加奈陀	235.2	44	21.2
アルゼンチン	264.5	43	34.4
濠州	137.5	47	2.4

皇國の政治的飛躍

政治的飛躍

十九世紀中葉以來の、東亞は白人列強の侵略の歴史である。虐げられた十一億の亞細亞民族の中に於て、敢然として之に對抗し、眞に獨立國としての面目を保持し來たものは、獨り日本あるのみ。而して國の運命を賭して露國の侵略に對し、友邦支那を救ひし以來、極東の守護者として、又有色人種の救済者としての日本は、全世界被壓迫民族の渴仰を受けるに至つた。

東亞に於ける白人列強植民地の番犬視せられた日本が、遂に彼等より警戒と猜疑の眼を以て視らるゝに至つたのは、實に日露戰爭以後のことであり、更に世界大戰に於て、一躍一流強國の列に連り、南洋委任統治區域の領有によつて、西太平洋上に有利な足溜りを獲得し、滿洲事變以來、日滿提携によつて大陸に不動の地歩を築き、茲に國防上確乎不拔の基礎を確立し、堂々自主的外交の大旗を掲げ、平和に關し所信を異にする聯盟を脱退し、白人流の覇道を排し、皇道正義に向つて勇往邁進するの氣魄を示すに至つて、

白人専横の歴史が書換へられむとするの状勢となつたのである。

此の更生日本の、正義に基づく政治的飛躍は、當然非正義を基調とせし白人列強の猖獗を誘起した。

彼等搾取國の權益の現状維持を、唯一の目的とする國際聯盟の權威保持の爲め、將た又、搾取國陣營崩壊防止の爲め、新興日本の進路を阻止せんとする策謀は、滿洲事變を契機として、全世界に亘つて形成せらるゝに至つたのである。

聯盟の、滿洲事變干與に因る無力暴露を、彌縫せんが爲め、皇國を侵略國呼ばりする事に成功し、總會に於て四十二對一票の絶對多數を以て、世界の公敵たるの折紙を着け、經濟封鎖によつて皇國を脅懲せんと欲した。然し今日の複雑せる國際社會關係に於て、斯る机上の決議が實行さる可くもない。聯盟は更に恥の上塗りを爲したに過ぎなかつた。加之日本を孤立に陥らしめたる結果は、益々日本をして向上の決意を堅めしめ、更に最近に於ては日支接近の機運を促進せしむるの意外なる結果を招來しつゝある。

歴史の示す如く、反撥心の強き事は、我が大和民族の特性である。麥の芽は踏みつける程伸びるといふが、日本國民は今日迄四圍の壓迫によつて發展し來つた。滿洲事變に伴ふ、聯盟否全世界の皇國への重壓は遂に皇國をして、四十二票は愚か全世界を敵とするも辭せず、國は焦土と化すとも我が正義は守らんと、悲壯なる決意を爲さしむるに至つた。

佛獨兩國を合したものより廣い面域と、波蘭に匹敵すべき人口と、無限の資源を抱擁する滿洲國の出現は、それ自體が既に世界大戰以來の歴史の大事實であるが、日滿兩國の提携、日滿經濟ブロックの結成は、アジアに於ける平和機構の礎石を爲すものであり、更に我が公正なる態度、牢固たる決意、事實上切つても切れぬ日支の經濟關係と、支那國民の覺醒との結果は、遂に日本に依倚することなくして、支那は存立すると得ずとの觀念漸く擡頭し、日滿支結束の理想の實現は、必ずしも夢想にあらざる事態とならんとしつゝある。

即ち天羽聲明に俟つ迄もなく、東亞に於ける皇國の位置は、從來の歐米追隨外交時代とは全く趣を異にして居る。東亞の平和は皇國の存在を無視しては存在しない。若し皇國を無視し、東亞の平和に對し、一指だに染めんとする者あらば、皇國は斷乎として之を排撃すべき決心を有し、又其の用意を有するものである。

右は獨り皇國の自ら任じある所であるばかりでなく、嘗ては日本に對し黃禍論を唱へた舊獨逸皇帝カイゼルも、新なる事態に應じ思想的轉向を來したと見えて、六月十一日デリーメールに依れば、同紙特派員ランドルフ、チャーチル氏に對し和蘭なるドールシの配所に於て次の如き感想を述べて居る。

日本は曠近、最も意義深き勢力の伸長を實現した。支那に於ける、日本勢力の發展阻止を思ふ如きは、全く無益の沙汰である。

日本は、英國が印度に對し、平和と秩序とを興へたる如く、支那に對し同様平和と秩序とを興ふる能力を有するのみならず、獨逸がポルシエヴイズムの侵入に對する、面

方の強固なる防壁である如く、日本は東に於ける堅固なる防塞を形成して居る。

平和機關としての國際聯盟の力に對しては、予は疑を抱くものである、ジュネーヴは

口舌の徒の曲藝場に過ぎぬ云々

又五月二十三日デリー、メール紙は左の如きロザリー、ミヤ卿自身の筆に成る論文を掲げて居る。

日本の國內事情に干渉せんとして其の拒絶に會ひたる聯盟は、英國を手足として日本に壓迫を加へんとし、英人の中にも之を支援しつゝあるものがあるが、思慮ある英人は一人として無關係なる事態に手を出すことに賛成しないであらう。聯盟のライロマン支那派遣に關聯し、他國の支那問題干與を排斥するの聲明を爲したるは、誠に當然の態度と謂ふべく、人口過剰にして世界の他の地方を閉鎖せられたる日本が、亞細亞大陸に勢力を伸張する權利を有するとは争へない。吾人は決して聯盟の手先となりて日本に戰を挑むべからず。又挑むことを得ず。蓋し日本は侮るべからざる海軍力を有し、且對日壓迫は英帝國瓦解を意味するからだ。又似非平和論者は、日本品の競争に依り攻撃を受けたる英國製造家の支持を受くるならんも、日本は現に英帝國に對しては輸入超過である。日本が外國市場に英國品より廉價に販賣しつゝある事實は、日本に危險なる喧嘩を賣る理由とはならず。日本は英國に對し自然の良友だ。吾人は率先、惡き聯盟の支那再建事業より手を引き「フレンドシップ、ウイズ、シャパン」の三字を以て極東政策の基

調とせればならぬ。

更に驚くべきは排日新聞系と稱せらるる、ハースト系の新聞の總主筆ブリスベーン氏が五月六月全米ハースト系二十數紙を通して掲げた論文である。其要旨は

日本のいはゆる「アジア・モンロー主義」を氣に病んでゐる大國は少くとも世界に三つある。そのうち英國はインドを領有してゐる結果三億に餘る人民をアジアに有してゐるが、そんなことにはお構ひなく七千萬しかない日本がかういふのである。

自分はアジアの主人公である。だからアジアに關して殊に支那問題について何かしようとするなら一應自分に話すべきだ。

これでは英國は虛心坦懐であり得ない。これについてまた一部の愚者は日米戦争論を發言してゐる。これほど馬鹿氣た話はない、日米兩國間には戦争をしなけりやならんやうな利害の衝突はない。たゞ何れかの一方がとんだ間違ひを起して見るに忍びない憤怒な行爲に出た時に戦争の危険があるのみだ。さらにまた日露戦争を豫言するものがあるのも理由なしとはしない。日本はロシアの東部國境に滿洲國を建設したが、これは米國を基準にして考へるとメキシコかカナダのあたりに日本帝國が全力をあげて押寄せて来たやうなものでロシアにとつては非常な脅威だからである。ところで米國民はこの間に處して如何にすべきや内治外交ともに多難の日本に同情的態度でよく理解するやう努むべきである。

人口過剰の情み、列國の門戸閉鎖

日本は今人口過多に苦しみ、國民的餓死が、然らずんば領土擴張の二途その一を運ぶより外なき分岐點に立つてゐる。最近數十年間に四千萬の人口増加といふ恐しい勢ひである。それに、日本では全面積の僅に五分の一しか耕地はないのに一平方マイルに四百三十人といふ人口稠密状態である。その上最も困ることは年々歳々七十五萬の人口増加だ。これをどう捌いて行くか問題だ。移民をすればよいではないかといふ向もあるが、しかしどこへ移民をするんだ？南方滿洲大陸はその奥地に未踏の地さへある位顧みられてゐないにも拘らず日本人の入國は嚴重に禁止されてゐる。太平洋のかなた米國やカナダも門戸を堅く閉ざしてゐる。この排他政策に對して日本人は白人から非常に侮辱されたものと考へて反感を抱いてゐる。が然し日本人は輕蔑出来るどころか、仕事の能率に於ては到底われ等の及ぶる良實をもつてゐる。カリフォルニアに於て白人が平等の立場にあつては、とても競争が出来ないと兎を脱いでゐるではないか。しかし、どうも黄白の雜婚はうまく行かないといふのが一般の意見のやうだ。

かくして日本は夥しい人口を増加しながらも海外移民として出したものは三百萬足らずだ。これでは九牛の一毛、人口問題の解決には少しも役立たない。産兒制限問題は日本の國風には合はない。それで日本では四苦八苦、百姓は寸土をも惜しんで耕し、漁師は大海に乗り出して衣食の道を講じてゐる。他の國には見られぬ生活難だ。普通の農家で約一エーカー半を耕してゐる、が農民の七十五パーセントは小作人で自分の土地をもたず従つて租税の外に小作料をも納付しなければならぬ。工場労働者の安賃銀の五分の一位で多數の家族を養つて行く憐れな農民の姿を想像して見給へ、こんな状態だから、ロシアが好んで宣傳の武器とするキャピタリズム打倒の聲は玄妙不可思議な魅力のある

ものと見えて日本へも容易ならぬ問題を提供してゐる。

そののみならず外交方面でも日本は不平不満である。日露戦争でロシアをたゞきつけた。しかし歐洲諸國の監視の眼前ロシアから餘り天然資源に富んだ土地を奪取することが出来なかつた。然るにフランスはドイツを破つた時にはどうだ。大變な獲物をとつてゐるではないか、最近日本は舊支那領ではあるが、もと／＼滿洲といふ獨立の一區域に割合に穩かに新帝國を建設して舊支那皇帝で滿洲の正統繼承者に王座を提供した。

これを見て全歐の諸國は驚駭した。をかし、話だ。この驚いた歐洲諸國こそはヴェルサイユ條約を締結して強食弱肉の實演をやつた國々である。これでは日本人が歐洲人といふものは偽善者だと思ひ込むのも無理はない。實際日本は人口過剰と圓價下落から来る外國市場に於る購買力の減退で、なんとか局面の打開を必要とするのに、世界は大戦後日なほ淺く、主要列國は各、自己の欲する分け前をとつて、出来るだけ現状維持で行かうとする時だから厄介だ。軍縮は日本の歡迎するところにあらず。日本は領土を擴張しなければならぬ羽目にある。よく日本は陷弊に陥つた猛獸だと歐米人にたとへられる。この猛獸は未だ力盡きず穴の近所に近づくのには牙をむいてかみつくと。しかしこのたとへは當つてゐない、白人天下の今の世界に於いて、日本は異人種であるから他の大陸にその翼をのばす上に於て非常な不便があるだけだ。決して穴の中に落ち込んだ不自由な猛獸ではない。空は廣々として飛行機の飛ぶにまかせ海は洋々として潜水艦の駛るに自由だ。若し西歐諸國にして賢明なりせば、このむづかしい問題も人種の保全、領土の確保を犠牲にしないで日本と協調して行ける筈である。

X X X X X

佛國の評論家サン・ブリース氏は四月二十一日ル・ジュルナル紙上で好意的批判を加へ、次の如く述べて居る。

日本政府は今回の聲明で支那に關する政策を宣明した。右政策は東亞モンロー主義の確立を基調とするといはれてゐるが、モンロー主義は一世紀以前に宣言されたものでその後本來の原則からすつかり離道に外れ、今やアメリカ帝國主義の福音と化するに至つた。日本政府の政策をかく轉化した意味に於けるモンロー主義と同一視するのは當らない。モンロー主義は元來歐洲各國の侵略に對し新大陸を擁護することを主眼としたものであり、日本政府の政策はこの本來の意味に於けるモンロー主義に近似してゐる。一部強國は支那を擁護するといふ假面の下に支那を日本に對する緩衝地帯と化さうとして居るが、日本政府はむしろ一部強國の工作に對し抗議を提出してゐるのだ。米國は支那の空軍組織に當つて居り、國際聯盟は支那に於ける國民黨の挑發行動に對して拱手して何等の處置を講じない。極東に對する聯盟の技術委員團は、かへつて日支兩國間に於ける和協の努力を流産に終らせるに少からず役立つて居るに過ぎない。日本政府は今やアジアに於ける秩序と文明の擁護者たることを中外に聲明した。日本こそ身を以て鏡を垂れる資格を持つものだ。地理上、政治上、經濟上の緊密な關係から日本が支那に於いて有する特殊權益を害はる限り日本政府は列強の合法的工作に毛頭敵意を抱くものでない。果してアングロサクソン民族は合法的擴張と帝國主義との間に於る微妙な區別を宣明したことがあらうか。

X X X X X

又巴里マタン紙主筆ステファアース・ローザンヌ氏は左の如く述べて居る。

「支那にむかひ下るるな」といふ日本の断乎たる極東政策の決意が突如として發表された時には、全世界が非常に驚いたやうである。たゞフランスだけが例外的にも靜觀的態度を崩さなかつた。これはフランスの識者が、この日本の考へ方は當然すぎるほど當然で、決して極東平和の大憲章九國條約に抵觸するものでないのを知悉してゐたからである。

九國條約の第一條並に第七條には、日本が支那にむける安全を脅かされた場合は、何時でも締約國の注意を喚起し得ることが明記されてゐる。故に他國が支那に軍用機の供給、飛行場の設置、軍事顧問並に派遣等の行爲に出た時は、日本にはこれに抗議する権限のあることは、一疑疑問の餘地がない。右様のことは年中行事になつてゐる支那の内亂に油を注ぐは勿論、悪くすると支那を驅つて對外戦争の決意をさへさせる虞があり、その結果は隣接國日本が非常に迷惑を蒙るばかりか、極東の平和を規定せる九國條約本來の趣旨も盡なしになる。

X X X X X

去る四月三十日、英國下院に於けるサイモン外相の聲明中、次の一項にはつきりこの問題の核心を説明してゐる。曰く

九國條約の第一條と第七條によつて日本の極東にむける權益は十分確保されてゐる。事實日本の特殊權益は列國

の齊しく認めるところであり、この特殊權益は日本のみの享有するもので、他の列國の共同均霑を許さざるものである。

然るに若し列國が、右の權益を日本が具體的に主張した時に反對するやうなら、九國條約は一種の空文に過ぎないではないか。また若し列國が假令反對はしなくとも日本と同様に支那に於て權益の享有を主張するなら、一體日本の特殊權益といふのはどこに在るか。

X X X X X

實に面白いことには、この九國條約の條文解釋について米國と日本との間にある意見の相違が、一九〇六年モロツコに關するフランスとドイツとの論争と同種類のものであることを思ひ出させることだ。ドイツはモロツコに關する國際協約の必要からアルジュエシラスに國際會議開催を提議した。その際ドイツはフランスの参加を危ぶんで、會議の席上必ずやドイツは他に率先してフランスの特權を認めることを豫約した。それでフランスはこの約束に約られて参加しいよく會議となるや、フランスはモロツコ國內に住居する多數歐洲人の生命財産保護のため三十名のフランス士官と五十名の土人下士とを常備し、土民兵を指揮する權限を要求した。これは、その隣にアルジュエリを持つてゐるフランスとしては實に内輪な要求ではあつたが、ドイツはこれに對してむ世辭マツプリーな獨特の外交辭令で、優秀なるフランス士官三十名だけでも僅に全モロツコを支配するに十分であるから、極一部分の防備には大裝裝すぎると言葉巧に反對し會議は一時危殆に瀕した。そこでフランス代表は

ドイツがのれくのかゝる小さな特權に反對するのは如何なる理由か判らぬ。ドイツはフランスを、モロッコに何等利害關係を持たないオーストリア、スウェーデン等と同權に見なすのか。

とつめよつた。このフランス側の立論は正々堂々たるものだつたので會議に列席した列國代表は異口同音にフランス支持に傾いたので、さすがのドイツも遂に兜をぬいだのだつた。

X X X X X

ひるがへつて今、極東を見ると日本は今日、九國條約締結國に對し、このフランスの場合と同様な問題に直面してゐる。だから關係列國に對して次のやうに主張したらよからう。

支那に軍用機、飛行機、武器、彈藥等を補給するのは、極東の不安を増し、日本の安全を脅すものだ。この際日本が列國に對して「少しは御遠慮下さい」と警告を發し得ないとすれば、一體日本の特殊權益といふものはどこにあるか。

以上の立論は單に消極的な既得權益擁護の辨であるが、この問題についてはなほ積極的に論すべき一面がある。列國は日本の權益を默認するばかりでなく、進んで全幅の支持を與ふべきである。何となれば日本は支那の秩序維持を望んでゐるが、列國は門戸開放を極東外交政策の根幹として居り、この兩者は究極において一致すべき性質のものであるからである。即ち支那が門戸を開放しても國內が無政府状態で蜂の巣をつついたやうでは折角の門戸開放、機會均等の大原則も列國に少しも商賣上の利益を與へないからである。

X X X X X

最近ロンドンのデリー・メール紙は昨年英國の對支貿易額が六百三十萬ポンドに減じ英國の貿易總額の七十萬分の一に下つたと報じ

支那の現状が改革されない限り英國の對支貿易は益、不振に陥り投資が困難になるばかりだ、よつて支那に於ける英國の繁榮を取り戻さんがためには、日本の極東政策、殊に對支政策を支持する外はない。極東問題について日本と衝突するやうなことは最の骨頂である。

と論じてゐる。尤もな議論だ。英國以外の列國とても同じことである。現に日本に委したために、滿洲國に平和と繁榮の曙光が見え出したではないか。軍閥や匪賊の横行してゐる支那本土も、日本の力によつて滿洲國におけるが如き希望のき出して來れば、對支通商關係をもつ列國もまた商賣上の利益に均霑することが出来る。従つて日本の「支那に手を觸れるな」との列國への警告は正當化される十分の論據ありといふべきである。

X X X X X

以上は何れも滿洲事變を楔機として、皇國に與へられたる國際的地位と、使命に對する眞に正しく又理解ある論と謂ふべきである。

皇國の飛躍は以上述べた、産業、人口及政治的の飛躍に止まるものではない。

更に滿洲國の出現と、之が國防の負擔は、一方に於て皇國に課せられたる重大なる責任であると共に、他方大陸に於ける國防の第一線の設定は、南洋に於ける海防の第一線と共に、皇國の安全を磐石の重きに置かんとするものである。

之を守るに精銳世界に冠たる陸軍あり、其滿洲、上海事變に於て發現したる、神速放膽なる作戰は、世界戦史上に於ても、特筆せらる可きもので、今後の、近代的裝備の充實を待つて、愈、光彩を放つべく、滿洲國の持つ、戰略的價值と共に陸軍の生命線は永遠に安泰である。

海軍の精銳は、滿洲事變に際し、其無言の存在其物によつて、日米戦争を未然に防止した。孫子の所謂戦はずして人の兵を破りたるもの、正に善の善なるものである。

其均衡を得たる艦隊の編成と、獨特の戦法とは皇國の有する、世界無比の地理的優越と共に、海の生命線を確保するの實力を有し、更に近く開かる可き海軍會議に於て、自主的國防を實現する曉に於ては、如何なる列國の喝喝に對しても、一步も譲らぬ國防力

を整へ、以つて皇國の運命をして泰山の安きに置かんとするものである。

我が海運は總噸數に於て世界第三位に在り、我が商品の進出と共に全世界に活躍する状態は眞に目醒しきものがある。昭和七年に於ける主要海運界の勢力を示せば左の如し。

英國	千噸	二二、八二〇	日本	千噸	四、二五八
米國		一三、二六〇	獨國		三、九〇一

鐵道組織及運營の技術の優秀は、世界に冠たるものがあり、先年蘇聯邦の招聘に應じ、多數の指導者を派遣したるによつても立證し得る。醫學の進歩、教育の完備、出版物の豊富多様(左表参照)等文化的方面に於ても、今や歐米一流國家に伍し遜色なきは勿論、之に優るものあるの状況である。

主要列強書籍出版統計

七二
(内務省調査による)

國名	年次	一九三二年	一九三一年	一九三〇年
蘇國		三、四一九五	三、八四〇三	三、五一〇〇
日本		二、二四七六	二、三一〇九	二、二一〇四
獨國		二、六九六一	二、四〇七四	二、一四五二
佛國		一、三八二二	一、三七〇一	一、五六九九
英國		一、五三九三	一、四六八一	一、四八三三
伊國		一、一九四九	一、二一九三	一、二五四五
米國		一、〇〇二七	一、〇三〇七	九〇三五

備考 日本は本表の外毎年官版約一萬種を發行しつゝあり。之を要するに、今や皇國は日露戦争、世界大戰、滿洲事變の三大事件の洗禮を受け、

國礎愈々、堅く、國運愈々、隆り、歐米人の考ふる如き、ふじ山、うた磨の夢幻的國家の域を脱し、近代的國家として、東西の文化を融合し、而も泰西の文明に墮せず、東洋の思想に偏せず、世界獨特の文明を有し、世界に冠たる武力を擁し、世界の何人とも雖も批議し得べからざる國家的理想を持つた、道義國家として現はれんとしつゝある。

これを利己的、霸道的、物質偏重國家民族より見る時は、正に彼等の爲めには邪魔物であり、小面憎き成上り物であり、盗人を照す白日の如く眩しき存在であらう。

茲に皇國の孤立し、嫉視せられ、憎惡せらるゝ原因があるのである。皇國にして眞に其理想に目醒め、先づ自ら之を體現し、彼等をして一指たりとも、染めしめざる内容と實力とを備へざるに於ては、彼の大戰前に於ける獨國の如き運命となるであらう。

茲に眞の非常時の意義が在るのだ。

以下皇國日本に對し白人列強の企圖しつゝある。策謀を分析して非常時の意義を検討することにしよう。

皇國に對する列強の策謀

七四

一 列強の反日戦線を形成し、皇國を孤立に陥らしめんとする策謀

1 滿洲國の獨立並日滿提携に關聯し、日本は聯盟規約、不戰條約、九ヶ國條約等の國際條約の侵犯者であり、武力による侵略者であるとの觀念を、國際聯盟其他の言論機關を通じて、世界に宣傳し、皇國をして第二の獨逸たらしめんとする策謀

2 第三インターの世界赤化運動を一時緩和して、世界の注意を、皇國を目標とする黃禍に轉せしめんとする、蘇國側の策謀と之に附和する列強の對日宣傳

3 日本商品の海外進出は、不正なるソシアル・ダンピングによる列國の既得商權の侵略なることを宣傳し、列國の對日經濟的連鎖を形成し、皇國産業の發展を阻止し窮地に陥れんとする策謀

4 日本の人口過剰と偉大なる民族的發展を恐怖し、日本人の不同化を理由とし、

其の海外發展の門戸を閉鎖し、移民の途を封じ、狭少なる島嶼に窘縮せしめんとする策謀

5 日支提携を阻止せんが爲め、國際聯盟を介し、或は個別的に、支那に對し恩惠を賣り、或は甘言を以て抗日を助成し、日支離間を計らんとする策動

6 日蘇戰爭を誘起せしめ、兩者を共倒れせしめんとする策謀

二 皇國の武力を削減せんとする策謀

今日の極東の事態を招來せしめたるは、皇國國力の然らしむる所であるが、強力なる武力の支持に依る事大なるに鑑み、之を削減せんとするもので、來るべき海軍々縮會議が之を目標とするものである事は明瞭である。

三 皇國の國家的團結力を薄弱ならしめんとする策動

日本の恐る可きは、正義に立脚する國民的理想と、旺盛なる國民精神と、鞏固なる團結力である。

就中皇國の正義觀と、道義國家的態度とは、白人列強の霸道的搾取に對する、絶大な脅威である。従つて之を打破せんが爲め、列強は凡ゆる陰謀の手を伸べつゝある。皇國を内部的に崩壊せしめんとする、第三インターの赤化運動、フリーメイソン及超國家的勢力の自由主義思想の鼓吹等も其現はれの一と見るべきであらう。

- 就中差し當り眼前に横はれる問題は
- 一、一九三五年海軍制限を目標とする海軍會議
 - 二、一九三五年三月聯盟脱退の效力發生に伴ひ、皇國に加ふることあるべき或種の

企圖

- 三、一九三七年蘇國第二次五年計畫の完成と極東軍備の完成並赤化攻勢の強化
 - 四、現に開始せられある列國との經濟戰
- であつて、所謂一九三五—六年の危機と稱せらるゝものであるが、本篇に述ぶる所のものは、右の危機を前衛戰として起る可く、既に起りつゝある永續的の危機に對する警告を爲さんとするものである。

大戦前に
於ける獨
國の飛躍

三、世界大戦前の獨國の飛躍と其後の運命

以上は最近に於ける皇國飛躍と之に對する列國の壓迫の實情とを紹介したのであるが、其狀況は實に、世界大戦前の獨國の國力進展と、列國就中英國との關係と酷似して居る。就中英國との關係は、當時の英獨關係に彷彿たるものがある。大戦直前に於ける獨の飛躍が、遂に英國の世界覇權を覆さんとするに至るや、英國は政略、外交、經濟の凡ゆる策謀を用ひて、遂に獨國並に其與國を孤立に陥れ、遂に世界大戦に於て之を覆滅したのである。我が皇國は、果して第二の獨國たる可きや否や、是れ實に將來の皇國に與へられたる最大の命題である。以下若干既往に遡り獨國の辿りたる運命に就て検討を試みやう。

十九世紀中葉以來、英、佛は亞細亞に、アフリカに廣大なる植民地を獲得し、其勢威隆々たるものがあつた。此間、後進國獨逸は、普佛戰爭に佛國を破り、巴里に城下の誓ひを爲さしめ、一八七一年一月十八日、ヴェルサイユ宮殿に於て、獨逸帝國を建設し、

茲に始めて、統一せる新興獨逸は生れ出たのである。繼て新興獨逸は、人口増殖甚しく、植民政策の必要に直面したが、世界中の富源といふ富源は、殆ど英佛蘭等により領有せられ、僅かに氣候不良、地味豊饒ならぬアフリカの一部及太平洋諸島を獲得し得たに過ぎなかつた。

斯くて獨逸は、不満足乍らも、大陸政策の殻より脱却し、世界政策を樹立し、海外飛躍に乗出した。

之が爲め急速なる陸海軍の擴張を行ひ、工業を起し、更にバクダット政策を樹て巴爾幹、近東地方への發展を企圖する等、新興獨逸の勢威は、旭日昇天眞に目醒しきものがあつたのである。

世界大戦前に於ける、獨逸飛躍の狀況を若干の例に依つて示して見やう。
先づ第一に工業の二大柱石たる、鐵及石炭の産額増加の狀況を、主要強國と比較して見ると、次表の通りである。

工業の二大柱石たる鐵及石炭産額

鐵産出額

國名	年次	年次
米國	一八九四—一九八年(平均)	一九一二年
英國	九、二三〇	二九、七二七
獨逸	八、二三九	八、七五一
佛國	六、一八一	一七、五八二
	二、二四七	四、八七〇

石炭

國名	年次	年次
美國	一八七六年	一九一二年
	一三五、六一二	二六〇、四一六

米	獨	佛
五〇、〇〇〇	四八、二九六	一六、八八九
四七七、二〇〇	一七二、〇六五	三九、七四五

即ち鐵に於ては、一八九〇年代に於ては米、英の次位に在つたが、大戰直前に於ては一躍英を凌駕し、而も英に二倍する鐵量を産出するに至つた。石炭は、一八七六年に於て英、米に次ぎ而も英の三分一を産出するに過ぎなかつたが、大戰直前には、米は第一位となり、英之に次ぎ獨は依然第三位ではあるが、英の三分二を産出するに至つた。外國貿易に於ては、獨國が各國民の趣味、嗜好を研究し、之に適應する商品を製産し、包装は夫々購買國語を用ふる等、用意至らざるなき有様であつた事は、尙ほ吾人の記憶に新なる處である。一八九〇年及一九一〇年の兩年に於ける。獨、英、米、佛四國の貿易盛衰の跡を表示せば左の如し。

國名	外國貿易總額		特殊品輸出	
	年次	區分	年次	區分
獨逸	一八九〇年	一七、六二四	一八九〇年	三、三三七
	一九一〇年	一七、六二四	一九一〇年	七、四七五
	增加額	九、五一九	增加額	四、一八八
英國	一五、三〇〇	二四、七一一	五、三八四	八、七八四
	增加額	九、四四一	增加額	三、四〇〇
米國	六九、一八	一三、八七三	三、五五〇	七、一八三
	增加額	六、九五四	增加額	三、六三三
佛國	八、三三七	一〇、二二三	三、〇四〇	四、八〇五
	增加額	一、八七五	增加額	一、七六五

一九一〇年に於て貿易總額に於て、獨は英に次ぎ第二位であるが、二十年間の増加額は英獨は略、同額である。即ち獨國の二十年間の發展は遂に英國に追及した事を證明し居るのである。

斯くして、恰も今日の日本の如く、到る處に於て獨逸商品は英米品を驅逐し、此儘の勢で推移せば、英は遂に通商戰に於て、獨に屈伏せねばならぬ狀況となつて來た。

海運界の状況は、英、米に次ぐ世界第三位で、總噸數は英國の約四分一であるが、漸次其差は減少せんとし、一九一〇年調査に依れば主要列強の商船噸數は左の如くであつた。

英	國	一一、五五五	千噸
米	國	七、五〇八	
獨	國	二、八五九	
日	本	一、六三七	

海軍力に於ては、英の對獨佛二國標準主義を打破し、遂に大戰前に於ては英の十に對する六、即ち今日の日英海軍比率の程度に迄清き付け、更に猶豫せば均等兵力となるの日、遠きにあらざることを思はしむるものがあつた。陸軍兵力が、其量に於ても實に於ても世界に冠たるものなることは、列強軍事界の定評のある所であつた。

斯くの如く暖々たる獨國の海外飛躍は、地球到る處に於て英國と衝突し、バグダット

へ進出せんとする所謂三B政策は、英國の印度統治を脅威し、之を放置せんか、遂に英國の覇權は獨國の爲め覆さる可き情勢となり、英國は何等かの手段によつて、獨國を覆滅すべく秘かに期する所があつたのである。此状態は現在の皇國の飛躍に對する英國の心境と全く其軌を一にして居るものである。

斯くする間に、一九一四年夏歐洲戰爭の勃發となつた。偶、獨國の犯したる政略的一大錯誤たる、白耳義中立の侵犯は、英國に取つて正に天來の福音であつた。

英帝國主義者は歡喜した。獨逸は侵略國である、平和の敵であるとの宣傳は、巧妙且つ組織的に全世界に放送せられた。英國は中立侵犯の獨國腐蝕を理由として、遂に之を撃滅すべく、協商國側に參戰することゝなつた。

獨國の白耳義中立侵犯は、確かに國際法的には侵略であり、罪惡である。然し之を兵略的見地より見れば、誠に當然過ぎる程當然の決心であつて、之は世界兵學界の通念であると言つてもよい。若し佛軍が獨の白耳義進入を豫知し、獨軍に先じて白國に侵入し

た場合、世界は果して、佛軍は侵略國なりと宣傳したであらうか？「勝てば官軍敗れば賊」の眞理は國際關係に於ても完全に適用せられる。

之に關し佛軍ベルサン將軍は一九二五年エール・ヌーベル紙上に於て

大戰前一九一〇——一一年の大演習の際、獨佛開戦せば、獨は必ず白耳義より侵入し來るべし。従つて、之に對抗する爲には、先づ敵に先ち戰略要點を占領する義務がある。一八三九年の中立條約は、戰爭を不可能ならしむる爲め、設けられたものであつて、戰爭勃發した以上、獨が先づ破るか、佛が破るか、兩者の中戰爭を多く欲した方が、白國に進入するであらう。

と述べ、暗に佛軍と雖も場合により白國進入の必要ある事を暗示して居るのである。

x x x x

斯くして五年の長期に互る大戰に於て、獨國は、聯合の包圍を受け、經濟的封鎖を蒙り、遂には内部的に崩壊を來し、茲に一八七〇年以來の獨逸帝國は哀れ五十年にして亡

びたのである。

ヴェルサイユに於ける城下の盟に於ては、植民地は悉く聯合國就中英佛兩國に奪取せられ、領土の一部は削減せられ、軍備は極度に縮減を強要せられ、剩へ永久に償還し得ざる如き、莫大なる償金を課せらるゝ等慘酷なる敗北により結末を告げ、茲に英國の企圖した、新興獨逸の破碎は見事に成功したのである。

一難去つて一難來る、歐洲に於て獨國は水平線下に姿を沒したが、之に反して戰勝に酔うた佛國は、勢威隆々たるものがあり、其陸、空軍は英國より遙かに強力であり、海軍力亦侮り難きものがあつて、前門に虎を防ぎ後門に狼を迎ふるの狀況となつた。

一方極東に於ては、大戰の結果、日本の産業的飛躍は申す迄もなく、南洋委任統治區域の領有と、英、米に追及せんとする海軍力の建設と、支那に對する權益の伸張を遂げつゝある日本の存在は、大戰によつて失ひたる經濟的創傷を極東市場に於て、醫せんと欲する歐洲列強に取つては實に目の上の瘤であつた。加之白人列強のアジア覇權動搖の

第一ヌタツプは踏み出されてあつたのである。

茲に於て、英米合作になる、皇國の支那に有する既得權益否認、之を條約化する九國條約、日本海軍力を削減し、英米海軍力を永遠に優越ならしめ、以て世界をリードせんとする海軍協定等を設定したる、華府會議となつたのである。

所謂主力艦の五、五、三の比率強要により、國防の安全感に多大の脅威を受けたる皇國海軍は、補助艦に於て驚くべき飛躍を企圖するに至るや、果然、倫敦會議の招請となり再び七割弱の比率を強要せられて、茲に皇國海軍發展の途は完全に封せらるゝ事となつた。

次に來つた問題は、滿洲事變並に大戰後の世界的經濟不況に乗じたる日本商品の海外進出である。

英國は既に一九三二年、オツタワに於ける大英帝國經濟會議に於て自由貿易主義を放棄し、プロック經濟に逃避する決心を堅めて居たのであるが、一九三二年六月七月の頃、

倫敦に於て行はれた世界經濟會議の失敗により、愈々經濟戰の開始已むを得ずと爲し、先づ印度をして日印通商條約の破棄を宣せしめた。次で日印會商となり、日英會商となり、最近の輸入割當制宣言迄進展し、今や日英は明瞭に經濟戰の状態に在る。

x x x x x

最近の大英帝國は將に倒れんとする大厦の如きものであることは世界の等しく認むる所、大厦の倒れんとするや、一木の能く支ふる所にあらざること自明の理である。嘗ては印度が露國に脅威せらるゝ頃は、日英同盟を結び、世界大戰に於ては、同盟の誼により、皇國は英國側に立ち、友邦獨逸の怨を買つて迄、英國側を支援し、遂に最後の勝利に貢獻せし所如何に大なりしかば、茲に輿説の要もあるまい。大戰間露國崩壊し、印度に對する脅威軽減し、一方極東に於ける皇國の勢威揚り、英國の對支權益動搖するかに見ゆるや、同盟を弊履の如く破棄し、米と結んで華府會議に於ける前記の如き措置に出で、今滿洲事變勃發するや聯盟を支持し皇國を苦しめ、遂に脱退の餘儀なきに至らし

めた。今復た、皇國に經濟戰を挑む。

吾人は本件に就て茲に詳説することを避け度い。唯、此の如き不信義は將來如何なる結果を生むべきかに就て一考を煩はさんと欲するのみ。

但し、英國と雖も、人なきにあらず、前掲の如く、ロザーミヤ卿の如き日本の知己あり、又一部には同盟復活を希望するものありと聞く。速に英國本位の利己的迷夢より醒め、世界永遠の平和の爲め貢獻せん事を希望して已まぬ。

四、獨逸失敗の原因

獨逸が英佛國側より徹底的打撃を受け、殆ど再起の力なき迄に悲慘なる敗北を受くるに至つた原因の攻究は、同じ運命の脅威に直面せる皇國將來の對策を決定する上に、極めて重要な關係を持つものである。本件に關しては既に史家の研究に於て盡されて居るが、茲に極めて常識的に見て、獨逸々運を傾くるに至らしめた原因を列擧して見やう。

一、獨逸は、世界を首肯せしむるに足る正義に立脚する國是を持たなかつた事、之即ち英國をして、獨逸は帝國主義、侵略主義國家なりとのデマを飛ばしむる隙を與ふる原因となつたのである。

二、經濟戰に對抗する爲地理的關係有利ならざりし事——獨逸は英、佛、伊、露等の強國に包圍せられ、容易に經濟封鎖を受くべき地理的弱點を持つて居た。原料を供給すべき植民地はアフリカ、南洋等本國と甚しく遠隔して居り、爲めに、列國の經濟封鎖に對抗し得なかつた事。

三、國防的にも地理的條件有利ならざりしこと―四周に敵國を有し、内戦作戦の不利なる立場に在つた。

四、外交政略を誤り孤立に陥つた事。

盟邦として、埃匈國、勃國、土耳其等を有つて居たが、英、佛、米、伊、露、日等の一流強國を、悉く敵國とした獨國の外交は、拙の拙なるものと謂はねばならぬ。就中從來親善關係に在り、歐洲に於て利害關係なく、當然中立を守らせ得る日本及米國を敵としたるは失敗の甚しきものと見る可きであらう。

五、宣傳戦の組織十分ならず、遂に英佛側の宣傳戦に敗れたる事。

獨國を侵略國呼はりし、戦争の責を獨國に歸し、世界を舉げて敵側に立たしむるに至つた事は、其原因の大半を宣傳戦の敗北に歸せねばなるまい。

六、自己の實力を過信せし事。

經濟的にも軍事的にも、英國と伯仲の間に在つたと言へ、一流國數個を對手として

交戦するだけの實力のなかつた事は、餘りに明瞭であつた。而も自惚れ強く、實力の正しき認識を誤つた獨國は、遂に大膽にも大戦の火蓋を切つたのである。

七、一般の情勢判断を誤つた事

米國の参戦は無論、豫想して居なかつたであらうが、英國が斯く速に参戦し、日本が敵側に立つことは、恐らく當初は豫想して居なかつたものと考へられる。況や同盟國たりし伊國の乖離をやである。

八、作戦と外交との協調を誤つたこと。

無制限潜水艦戦の開始の如き其一例である。

九、戦前の英佛關係の悪化に鑑み、將來戦を考慮しての對策十分ならざりし事、就中國際關係を自己に有利なる如く改變するの著意十分ならざりし事。即事前の外交的工作に於て十分なる措置講じあざりし事。

十、國內に反國家的分子を包含しありし事、竝に國民精神の弛緩に依り内部的崩壊を來した事。

之を要するに近代國防の要義即ち、政略、外交、經濟、軍事、思想等の統合的準備に於て欠陥ありし事が失敗の主因であると見なければならぬ。

五、結言——危機突破對策

一、經濟戰對策

本件に就ては十二月九日廣田外相の名に於て、中外に對して發表せられた聲明書に明瞭である。

要は、國內に於ては、産業統制、輸出統制を行ひ、外に對しては互惠條約の締結等によつて、圓滿なる貿易關係の設定に努むるのであるが、邦品に對し、不當なる壓迫を加ふる國家に對しては、報復關稅を賦課する等の手段によつて對抗せんとするものである。尙ほ新市場の獲得に努力するの要ある事は、論を俟たぬ所であらう。

茲に注意を要するは、現下の國際經濟競争は單なる平時的競争状態にあらずして、眞に皇國の國運を左右すべき戦争状態に在ることである。之に勝利を得ることは絶對的要件であり、従つて之が對策として、眞に舉國一致的の施設を必要とし、其目的達成手段たる産業統制なり輸出統制なりを遂行する爲めには、茲に自から新なる經濟機構

組織の必要を生ずるといふことである。

二、日本精神の宣布

列強の對日反感は、一面皇國の驚異的飛躍に基くと共に、皇國の真意に對する認識の
缺如による事も大である。

皇國は肇國の始めより、嚴として存する大理想たる、八紘一宇の精神により、排他的
利己主義を排し、四海同胞、一家族的和親の實現によつて、世界人類の發展と、恒久
平和とを招來せんことを庶幾しつゝあるものである。

彼のチモシイ・オコンロイの「皇道なる名稱は、世界支配の大野心をカムフラージュ
せんが爲め與へたるものである」と謂ふ如きは、全く我が真意を認識せざるもので、
斯る蒙を啓く爲め、日本精神を世界に向つて宣布することが喫緊である。

三、宣傳戰策

政治、經濟、思想等各種の角度よりする、反日的宣傳に策謀の進展しつゝあること

は、既に述べた通りであつて、國防の見地よりすれば、今や宣傳に關しては完全に戰
争状態に在ると謂ふべきである。

茲に於て、前述の如く、日本精神を世界に宣布し、皇國の真意の存する所と、宇内に
知らしむると共に、皇國を陥れんとする宣傳に對抗し、皇國の立場を宣明し、且つ皇
國自體の國民精神を作興維持し、如何なる外國の企圖に對しても動搖せず、舉國一致
の實を擧げ、非常時を突破するの對策を講ずる必要がある。之が爲め、内外に對する
宣傳、啓蒙の爲め必要なる機構の施設を必要とする。

四、日支提携の必要

東亞平和の基調は、日滿支三國の共存共榮に在る。而して日滿兩國の提携は既に成り、
東亞の平和は茲に確立せられんとして居る。然るに現下の情勢は支那を右のプロック
より離間せんとするに在る。

此の運動は二方面より觀察せられる。一は支那自體の一部就中國民黨の誤れる政策に

基くもの、一は此の機運と滿洲事變とを利用し、漁夫の利を占めんとする聯盟及列強の策動である。其裏面に或る超國家的勢力の暗躍ある事勿論である。

滿洲事變當時獨國海軍大佐アルフレッド・ストース氏は「日本に對する強盜遠征」なる書中に於て日支問題に論及して曰く

「抑、支那民族は、其民族の危険が、鼻先にブツかる迄は感付かない鈍感民族である。従つて支那は、強盜世界政策—本來、唯支那の解體をのみ企圖する所の世界政策—の使喚によつて踊り狂ひ、而して日本に對して排日侮日を擅にして居る。支那は先づ日本の自由を保障したる後、始めて自國の安全と自由とを贏ち得るのであらう云々」

と又述べて曰く

「此の強盜的世界政策は、支那の國民的自覺の萌芽を、支那人同志の國內戦によつて、摘み取つてしまへばよいのである。そして支那が自ら日本に對して攻撃の準備が出

來たと思ふ時機—換言すれば、日本が支那の攻撃に對して自衛上、保障占領をしなければならなくなる時機—に日本の進入に對し支那をけしかける必要があるのだ。之が今日迄強盜政策者が、支那と日本に對して、取り來つた道である。此故にあらゆる方法を以て滿洲は支那の領土であると宣傳し、滿洲の門戸開放を要望し來つたのである。

右の世界政策に對する日本自體の防衛は、これ取りもなほさず、支那將來の防衛を意味するものである。日本が今日支那に對して努力する所は、結局支那の國家的努力を鼓舞するものに外ならぬ。是に於てかユダヤ、キリスト、世界集會國家一味は、先づ日本を屈伏せしめんと欲しつゝあるのである。」

と、獨國一大佐の言であるが何と其の眼光の透徹せる。實に明治以來の東亞の歴史は右の數言に盡きて居るではないか？

此の歴史は日清戦争後の三國干渉に始まる。次でスラヴ禍に對抗すべく日本をして露

國と戦はしめ、勝利を得るや、某國は日本の戦捷の効果を局限せしめ、世界大戦に於ては、ストーム大佐の言へる如く「日米同盟の結果東亞の番犬としての日本を孤立獨逸を撃滅する爲めに利用」し目的を達成するや、華府會議に於て日英同盟を破棄し、石井ランシング協定(日本の對支特殊利權を認めたる日米間の協定)を廢棄し、日本の海軍力を六割に削減せしめ、英はシンガポール、米はハワイ海軍根據地完成の權利を獲得し、日本は太平洋の防備の現状維持を餘儀なくせられた。

更に九國條約によつて日本の對支發展を制肘し、不戰條約に英米は自己に有利な保留を附し、倫敦會議に於て更に英米共同して、日本海軍を制限し就中純然たる防禦武器たる潜水艦迄も制限せしめた。

以上述べた事は嚴然たる歴史の事實であり又悉くストーム大佐の著書中に遺憾なく暴露せられてある所でもある。

此の如き情勢を放任する事は、結局、支那の分裂又は國際管理の素地を造るものであり、支那の友邦とし、又東亞平和維持の責任者として、皇國の斷じて容認し得ぬ所である。萬一支那にして、覺醒する所なく、依然として以夷制夷の策を棄てず、東亞永遠の平和を妨ぐる如き舉に出づるならば、皇國としては東亞の爲め、アジアの爲め、延ては世界平和、人類幸福の爲め、將た又日本自體の自衛の爲めにも斷乎たる措置に出づるの外ない。

此の事は支那も列國も十分諒承し置いて貰ひ度いものである。幸にして最近、支那政局の一部にも達眼の士出で、日支提携の機運擡頭せんといつゝある。又列強も漸次日本を度外視して東亞に對する政策を實行し得ざる事を認め來りつゝある。眞に慶賀に堪えない。願はくば、皇國に於ても舉國一致此の機運をして有終の美を遂げしむる如く努力せん事を。

五、外交對策

當局に於て、萬全の對策を講せられつゝあるを以て茲に陳說の要はないが、般鑑識か

らず獨國の失敗に省み、現在の國際情勢と將來の推移とを至當に判斷し、機先を制して、必要なる手を打ち、一朝事ある場合に於て遺算なからんことを要する。而して激刺たる外交は常に充實せる國力の支持を要し、就中強力なる軍備の背景を必要とする。外交に關し忘る可らざるの一事は、皇國を繞る現下の國際情勢は、近代國防の觀念に立つて見れば、實質的には、經濟上は勿論、政略的にも思想的にも、交戰状態に在り、見る可き状況に在り、總ての施策は此の觀念の下に講せらる可きものであるといふことである。

六、國防充實の急務

外交は實力を伴はねばならぬことは既述の通りである。實に外交と國防とは楯の兩面の如きものであつて、國防なくして外交はあり得ない。

眞に東亞の盟主として名實共に重きを爲し、日支提携を實現し、東亞永遠の平和、人類共存の模範をアジヤの一角に形成する爲には、之を發言し之を遂行する爲に強大な

る實力を必要とする。況やストロス大佐の言の如く、強盜的世界政策の我が進路を遮るものあるに於てをやである。

ストロス大佐曰く

「日本は今や完全に隔離されてしまつた。アメリカ、カナダ、オーストラリヤ、南アメリカ並に廣漠たるシベリアは溢れつゝある日本の人口に對して、侮辱的條件を以て之を拒絶して居る。日本は其の島國に於て人口過剰の苦境に呻吟して居る。節制自ら甘んずることを知れる日本國民は克く、此の状態を堪へ忍んで來た。然し乍ら新しき世界の各方面に於て未だ耕されざる處女地が、渺茫際限もなく、横はつて居ることを思ふならば、日本に此の忍耐を強ふるといふことは、此の上もなき不條理であり、不法であると言はねばならぬ。日本は最早其生産を以てしては生存を續けることは出來ないのである。

而も世界各地に於ては、人々は生産物を賣り捌くことが出來ずに、餓死しやうとし

て居る。是れ凡ゆる商業手段の強力なる獨占的支配が世界に強いた不自然にして人為的なる搾取經濟の崇りである。世界大戰爭中、獨逸の自由なる通商にあらゆる困難が加へられた如く、今日、日本國民は全く同様の立場に置かれて居る。

日本におびたゞしい綿を賣り渡して居る、英領印度は、今日超國家的な支配勢力の爲めに、日本の通商に對して其の門戸を閉鎖した。シヤム亦然り。印度、支那亦然りである。日本の通商は支那の市場を奪ひ去られた。吾人が見渡す限り、到る所日貨に對するボイコット状態ではないか。日本が最も勤勉に其の開發に最大の功績を盡した所の唯一つの自由なる區域即ち滿洲でさへ、今其の開發成らんとするや、則ち之を日本の手から奪ひ取らうとして居るのである。

此一文を見て、感憤せざる日本人があるであらうか？然し國防は戰爭を爲さんが爲めに存在するものではない。戰爭を避けんが爲めに存在する。戰爭に導かざる爲め、外交的に解決せんが爲めの背後の力として存在するものである。皇國が眞に非常時を突

破し、第二の獨國たらざらんが爲めには、現實に東亞に存在若くは到來し得べき脅威、壓迫、障礙たる總ての力に對抗し得る實力を備へねばならぬ。

現在整備しつつある陸軍兵備は、僅かに大戰前型の裝備を大戰後型迄追及せしめつゝあるに過ぎぬ。従つて滿洲事變を契機として發生し、就中、聯盟脫退及列國の經濟挑戦によつて惹起せし新事態及蘇國五年計畫による新軍備に對する我が國防は未だ十分とは稱し難い。就中空軍に於て然りである。

一方海軍は今や海軍會議を前にして、再びストーネス大佐の所謂強盜政策の祖上に上らんとしてゐるではないか。

x x x x

抑、國防には消極國防、積極國防の二種がある。從來の如く國家財政の許す範圍に於て之と調和する國防を以て満足せんとするもの即ち消極的「氣休め國防」であつて、「無い袖は振れぬ」といふ思想に由來する。これは從來多くの國家の採用し來つたもの

であつて、此の如き申譯的國防が國家を如何なる運命に陥らしめたかは、歴史が雄辯に物語つて居る。

白耳義が獨軍に蹂躙せられたのも、獨國が、大戰直前僅、數師團の増兵すら許されず、遂に大戰當初の對佛作戰に蹉跌を來し、五年の永きに亙る長期作戰に導くの愚を演ずるに至つたことも、原因は前述の如き妥協的國防の缺陷に在るのである。

之に反し蘇聯邦は、世界赤化の大理想實現の爲めには、世界最強の軍備を必要とし、國力を舉げて之が充實に邁進し、國防本位の經濟組織を探り、既に數に於ても、裝備に於ても世界に冠たる陸軍を建設し、將來の飛躍準備を終らんとしつゝある。右は所謂積極的國防であつて、國策遂行上眞に必要とする軍備は、萬難を排しても建設せんとするものである。

皇國は今や、列強の重壓下に在つて、國運の岐路に立つて居る。依然として、姑息なる消極的國防を以て甘んずるに於ては、此の非常時局を突破し、皇國の大理想の實現

に向つて邁進し得るや、些か不安なき能はずである。而して現在の經濟組織を以て、眞に必要な國防を建設せんとするは、木に倚つて魚を求むる如きもので、遂に國家財政を破綻せしめ、國民生活を脅威し、果ては國民精神を弛緩せしめ、國防を完からしめんとして、却て國防を破るの結果となるであらう。

今日我が國に必要なは、國防を經濟に調和せしめんとする舊思想にあらすして、國防に經濟を追隨せしめんとする、新思想でなくてはならぬ。即ち國防に必要な經費をば、國民生活に脅威を與ふることなくして捻出し得る如き經濟組織を設定することに在る。日本精神の高調擴充國防本位の國策を遂行するに必要な新機構の創造經營は、昭和維新の目標であり、理想である。國を舉げて、朝も野も、文も武も齊しく此目標、此理想の把握實現に邁進せねばならぬ。本件に就ては更に稿を更めて述べることにする。

附 記

本小冊子の稿成るの日、米國コロンビヤ大學教授エルドリツチ氏の著書 *Dangerous thoughts on the Orient* (譯名「米國よ日本を知れ」) 出づ、其所論、概ね吾人の言はんと欲する所に觸れ、皇國の進義國家なる所以を明かにし、皇國の立場を正視し、率直に之を記述して居る。一讀を羨む。

666
50

